

教養教育に関する評価

－総体的な評価機構の確立をめざして－

教養教育調査研究委員会

【趣旨】本報告は、1998年度前期に実施された教養教育に関する評価をまとめたものである。本報告書は、1998年9月30日に実施された「今後の大学教育を考えるための全学教官集会」に提示された中間報告を書き直したものであり、その最終版である。実は、中間報告を作成する時点で、まだ4名の教官の期末試験の成績が教養教務係に提出されていなかった。そこで、中間報告では、学生による授業評価の分析では58科目を取り扱っていたが、教官の成績等の分析では54科目を取り扱うこととなった。これに対して、この最終報告では、両方とも58科目を対象としている。したがって、中間報告とは異なったデータを対象としているが、たとえば出席率とか合格率とかAの率とかいった値では、58科目に変更しても中間報告と同じ値のままであった。したがって、本報告書の分析は、新しいデータに基づいているが、中間報告をほとんど変更する必要がないものとなった（期末試験の後に追試があり、新しいデータにはその追試部分が入っている。そのため、本報告書Ⅳの「社会学E」のデータで少し変更が生じたが、それも分析内容を変えるものではなかった）。但し、中間報告では、教養教育に関する評価を実現するためのさまざまなノウハウを記述していた。香川大学としては授業評価を継続してやっていく必要があり、そのために、必要な作業をできる限りマニュアル化し、それを記述しておきたかったからである。しかし、そのマニュアルはあくまでも個別香川大学のものであり、全国の大学に配布される『教養教育研究』に掲載する必要は必ずしもないものである。そこで、その部分は本報告書ではほとんど削除することとなった。もしそうした部分に興味があるなら、本学教養教育係に問い合わせただけで、いつでも中間報告を送付する用意がある。

I 教養教育に関する評価のあり方について

1. 授業評価のあり方

香川大学において、今回実施した教養教育の授業評価の特徴は以下の点にある。

何よりも大事なことは、評価が総体的に行われることである。授業評価というとすぐ学生による授業評価が思い浮かべられ、先生の人気投票のような形になりやすいし、その弊害もすでに強く主張されている。学生による授業評価が必要なのはいうまでもないことであるが、これは需要（ディマンド）サイドの評価である。供給（サプライ）サイドの評価と一体化されて、はじめて意味がある評価となるであろう。いままで指摘されたディマンド・サイドの評価の弊害も、ディマンド・サイドとサプライ・サイドが一体化すれば、克服されるかもしれない。否、一体化といっても、中心は、教官＝サプライ・サイドの方にあることはいうまでもない。学問の先達である教官が、研究・教育者としての責任感をもって授業を担当する。これが基本である。ただ、それが一方的なものにならないために、学生による授業評価がそれを補う役割を果たすこととなるのである。

中心になるべきサプライ・サイドの評価も総体的でなければならない。大学の教官は、まず、自

分の授業の内容や方針をシラバスに提示する。シラバスの示し方一つで、学生が興味をもつかどうかも決まってくるから、シラバスは非常に重要な意味をもっている。大学4年間で履修する授業の数は、開講されている授業の数の数分の一でしかない。学生が選ばなかったら、その授業はその学生にとっては存在しなかったと同じことになる。

次は、シラバスに沿って授業を行うこととなるが、授業を何回行ったか、補習や小テストを何回行ったかが把握されねばならない。そして、授業に出てこないで授業を厳しく批判するだけでは、批判する資格はないと言わざるをえないから、その授業に学生はどの程度出席していたかもきちんと把握する必要がある。

最後は、成績判定である。いかなる問題を作成したのか。履修者に対し、どの程度が受験したのか、合格者（または不合格者）はどの程度出したのか、Aをどの程度出したのか。これらの値もきちんと把握する必要がある。到底解けないような問題を出しておいて、単位だけを安易に出すというやり方があってはならないだろう。また、単位が出やすいから学生の授業評価が高いのか、単位は出にくいそれでも学生の授業評価が高いのか、こうした中身がきちんと把握されなければならない。

こうしたサプライ・サイドのデータは、すでに経済学部では数年前から教授会に提示されるようになっていた。香川大学の学業成績はすべてコンピュータ処理されているから、コンピュータ処理されたデータから、履修者・受験者・A～Xまでの数等をパソコンで処理できる形に落とし、それをパソコンで加工したものが教授会で回覧されていたのである。のみならず、試験問題についても教授会で回覧されていた。今回の教養教育の授業評価では、試験問題を集中し回覧するということではなかったが、コンピュータから情報を取ってくることは実施した。その際、経済学部で利用していたプログラムを転用した。

他方、ディマンド・サイドの情報は、今回が初めてではない。一般教育時代の1993年度には『学生による授業評価』（試行）報告書』が出版され、1995年度には『学生による授業評価』（試行）の分析』が出版された。一般教育部は1994年度廃止され、新しく（全学的な）教養教育委員会体制が発足した。香川大学では、一般教育時代は教育学部がその中心を担っていたが、教養教育体制に変わるとともに、教養教育は全学協力体制で実施されることとなった。そうした教養教育体制になってからは、学生による授業評価ははじめての試みである。はじめてであるから、今回は、実験的に行うこととした。事務官には従来なかった多くの新しい仕事を自発的に担っていただいた。授業評価は、だいたいその期の最後の授業で行うこととなるから、期末試験時期とほぼ重なってくる。そこで、従来の仕事が突然倍増するような形になった。しかも、教養科目は、専門科目との調整から、同じ時間帯に複数の科目が配置されている。したがって、たとえばアンケート回収箱だけでも、かなりの数を用意する必要があった。学生による授業評価がともかくも滞りなく実施できたのも、そうした事務官の協力があったからである。

2. 参加した授業

今回は実験的に行うものであり、参加は強制するものではなかった。そして、一度に全ての科目で実施するのも難しいから、主題科目と共通科目に限定することとした。前期の主題科目と共通科目を担当している先生方をお願いをしたら、58科目の担当者から参加の返事がいただけた。ここに

は非常勤の先生も含まれているが、参加率は94%であった。ここに記して感謝する次第である。
以下は、参加していただいた科目の科目コード、授業題目、担当者等である。

主題科目

A

- 000111 大学における学問 学長ほか
- 000112 世界と認識 土屋
- 000122 「食」から見たヒトの健康 藤原
- 000123 スポーツと健康 岡田（泰）
- 000131 平和の思想 村瀬
- 000133 軍縮と平和 高林
- 000141 自然史への招待 金子
- 000144 生命倫理 佐藤（優）ほか

B

- 000212 世界の宗教と地域文化 白川
- 000213 ヨーロッパ文化の伝統と文学 稲富
- 000221 瀬戸内の遺跡 丹羽
- 000223 瀬戸内の歴史 田中（健）
- 000233 社会正義と法 土田
- 000234 道徳的ディレンマと価値選択 村瀬
- 000242 情報と経済 大野
- 000244 情報とメカトロニクス 永田

C

- 000312 造形美術の世界 浦山
- 000314 舞台芸術の世界 最上ほか
- 000321 現代文化を考える 武重
- 000322 生と死の文化地理学 稲田
- 000331 日本社会と人権問題 根本
- 000334 産業社会と人間生活 安井（敏）ほか
- 000341 地球環境と気象 森（征）
- 000342 化学と人間生活 佐々木（信）

共通科目

人文科学分野

- 010101 哲学A 黎明記における哲学の発展 土屋
- 010201 論理学A 論証と命題問題 佐藤（公）
- 010301 倫理学Bイ 倫理学の諸問題 斉藤
- 010501 歴史学A 近世の社会と民衆 木原

- 010504 歴史学M 第2次大戦下のフランス 渡辺 (和)
010505 歴史学O 日本考古学の諸問題 丹羽
010803 文学I 伊勢物語を読む 大伏
010804 文学R 書(筆文字)ノススメ 前田
010805 文学T 小説の方法―昭和前期の文学― 高橋 (龍)

社会科学分野

- 020102 法学Bロ 憲法 平田
020201 政治学A 政治学入門 大賀
020302 経済学E ミクロ経済学入門 井上 (貴)
020401 社会学E 1 社会科学への入門 安井 (修)、細川 (滋)
020402 社会学E 2 経済学と人間学 山崎 (怜)
020403 社会学G 社会学入門 古川
020702 地理学E 水の地理学 新見
020801 心理学A 心理学概論 市河
020803 心理学F 人間のこころと行動をさぐる 坪田

自然科学分野

- 030102 数学E 1 線型代数 曾
030104 数学T 1ロ 微分積分 平田
030106 数学T 2ロ 線型代数 岩本
030201 物理学K 1 物理学の基礎I 青木
030203 物理学L 1 基礎物理学I 林
030205 物理学P 物理学実験 伊藤・中西
030301 化学K 1 基礎科学I 西原
030302 化学L 1 環境と化学物質 川浪
030304 化学P 化学実験 高尾ほか
030403 生物学K 基礎生物学 高橋 (正)
030404 生物学P 生物学実験 末広ほか
030501 地学A 全地球史 寺林
030502 地学C 地球環境の変遷と脊椎動物の進化 仲谷
030503 地学Q 宇宙を探る 松村
030504 地学P 地学実験 森 (征) ほか
030901 情報科学A コンピュータによる情報処理 熊野

3. 本報告書の構成

本報告書は、Ⅱでコンピュータから取り出したデータ(サプライ・サイドのデータ)の分析を行い、Ⅲで学生による授業評価(ダイヤモンド・サイドのデータ)の分析を行う。授業評価の目的は、あくまでも個別授業のあり方を改良していくためのものである。ⅡやⅢの分析は、全体的な傾向を調査したものであり、個別授業の評価ではないが、個別授業の評価をみる際にも、全体的な傾向がわ

かった方がわかりやすいであろう。その意味で、個別授業の評価の際、参考にしてもらいたいと考えている。なお、個別授業の評価は、今回は公開しないことを前提として進めてきた。したがって、それは個々の担当者に任されることとなる。ただ、個々の担当者としては、何か例があれば分析がしやすいであろう。そこで、IVで個別授業科目の分析例を示すこととした。これも参考にしていたければ幸いである。

なお、統計処理と表計算ソフトの利用にあたっては、経済学部の大藪教授に多くの貴重なアドバイスをいただいた。ここに記して感謝します。

II 教官の成績判定等

1. 全体の特徴

成績判定の資料から、受講登録者数（以下、登録者数と呼ぶ）、受験者数、合格者数、Aの数を取り出した。そして、これらのデータに、アンケートの回答数を出席者数とみなす形で加えることとした。アンケートは、期末試験の直前に実施しているので、アンケートの回答数を（最初の授業を別とすると）出席者数の最大値と考えることができる。なお、アンケートの回収先を教養教育係としたため、回収が少なくなってしまったケース（20名）があった。そこで、そのケースは出席者数を申告してもらった数（110名）で計算した。その結果、出席者数は総数ではアンケート回答数より90名増え、5370名となった。但し、この増えた90名の学部・学年別内訳は当然わからないから、IIの3・4のデータでは、5280の回答数が使われている。しかし、内訳がわからない90名に学部や学年の特別の偏りがあるとは思えないので、この90名を含めないで分析しても問題はないであろう。

まず、表 II-1 をみていただきたい（詳細については、VIIを参照）。

表 II-1

	登録者	出席者	受験者	合格者	A
総数	10330	5370	9124	7471	2430
主題A	1976	946	1858	1507	355
主題B	2040	1129	1856	1534	657
主題C	1932	1100	1710	1442	459
共通人文	1344	620	1130	854	302
共通社会	1358	678	1112	928	238
共通自然	1680	897	1458	1206	419

	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率
総数	0.52	0.59	0.88	0.82	0.33
主題A	0.48	0.51	0.94	0.81	0.24
主題B	0.55	0.61	0.91	0.83	0.43
主題C	0.57	0.64	0.89	0.84	0.32
共通人文	0.46	0.55	0.84	0.76	0.35
共通社会	0.50	0.61	0.82	0.83	0.26
共通自然	0.53	0.62	0.87	0.83	0.35

総数でいうと、受講登録者：10330、出席者：5370、受験者：9124、合格者：7471、A：2430となる。

まず、出席状況をみてみよう。出席率として、二つを考えることができる。一つは、出席者／登録者として計算する値で、登録した者がどの程度授業に出席したかを示すものである。以下、これを出席率（1）とする。総数でみると、出席率（1）は、52％となる。もう一つが、出席者／受験者

として計算する値で、受験した者が実ほどの程度授業に出席していたかを示すものである。以下、これを出席率（2）とする。これも総数でみると、59％となる。出席者数はアンケートの時の数であるから、最大値であるが、最大値で考えても、実は試験を受けた者の59％しか授業に出ていないこととなる。平常の出席が最大値の8割位であるとする、5割弱の出席率になる。しかも、教養教育の出席者の中心は1年生であるから、3・4年生が中心となる専門教育では、もっと悪くなるだろう。学生は、全体としてみると、あまり熱心に授業に出ているわけではないこととなる。

出席していないにもかかわらず、試験だけは受けている学生が多いから、 $\text{受験率} = \text{受験者} / \text{登録者} = 88\%$ という高い値になる。受講届を出した以上、授業に出ていなくても試験だけは受けるという学生が多いということであろう。ところが、 $\text{合格率} = \text{合格者} / \text{受験者} = 82\%$ となっているから、出席率が悪いにもかかわらず、合格率はかなり高い値となっている。たぶん合格率が高いから、受講届を出した分は受験するのだろう。もし出席率の最大値だけの合格率を出すなら、 $\text{合格率} = 59\%$ でよいはずであり、 $\text{不合格率} = 41\%$ というのが、授業に出ていない者を落とした場合の不合格率になる。ところが、実際は、それより23ポイントも低い18％の不合格率になっている。香川大学全体としては、少し甘い評価となっているかもしれない。

合格者のうち、約3割がAを取っている。Aというのは、教師としては自分が説明したことをほぼ理解してくれたと思った（教える側としていえば、学生の解答に満足した）評価であろうから、合格者の33％、受験者の27％、出席者の45％がそれに相当することとなる。

次に、出席率・受験率・合格率・Aの率の相関関係をみてみよう。この相関関係は、科目グループ別ではなく、すべての科目でみることにする。相関係数は、表Ⅱ-2のようになる。

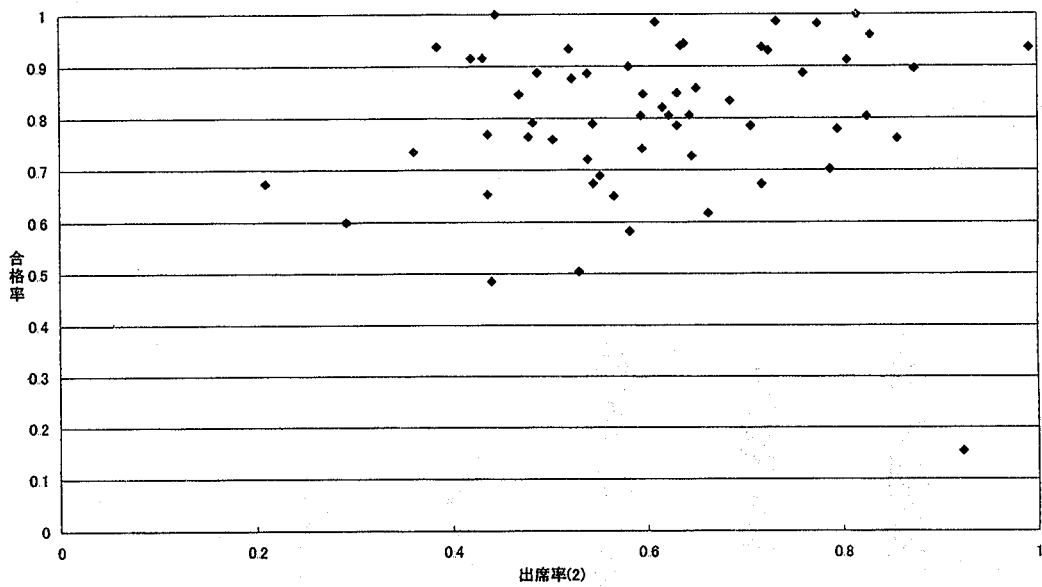
表Ⅱ-2

	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率
出席率(1)	1.00				
出席率(2)	0.82	1.00			
受験率	0.28	-0.31	1.00		
合格率	0.28	0.11	0.23	1.00	
Aの率	0.28	0.14	0.21	0.34	1.00

出席率（1）と出席率（2）の相関係数が高いのは当然であろう。他の相関係数はどれも高くない。「関係がないとはいえない」程度の相関である。それでも、そうした緩い相関関係にも一定の意味があるように思われる。

まず、出席率（2）と受験率がマイナスの相関関係になっている点である。したがって、 $\text{受験率} = \text{受験者} / \text{登録者}$ の高い科目は、出席率（2）＝出席者／受験者が低い、逆は逆ということになる。学生にはあまり出席しなくても単位が取得できそうだという科目があり、その場合の態度として、受験率は高いが、出席率は低いという行動を取る。出席率が低ければ受験率も低くなってもよいはずであるが、こうした科目では、出席していない学生が多く受験して、全体としての受験率を高めることとなる。これに対して、容易に単位をくれそうもないという科目もあり、その場合の態度として、出席率は高いが、受験率が低いという行動を取る。出席率が高ければ受験率も高くてもよいはずであるが、こうした科目では、出席しない学生があまり受験しないので（試験は、1日に数科目ある場合もあるから、学生も無駄なことはしないのだろう）、全体としての受験率を低めることとなる。

次は、出席率と合格率の関係である。出席率（1）でも出席率（2）でも、合格率との相関関係は低い、出席率（2）との相関係数の方が低い。こうした関係は本当にそうであろうか。そこで、出席率（2）と合格率をXYグラフでみてみることにしよう。図Ⅱ－1参照。



図Ⅱ－1 出席率と合格率

この図をみると、異常値があつて、それが相関係数を低くしていることがわかる。つまり、出席率が非常によいにもかかわらず合格率が20%を切っている科目があり、それが相関係数を低くしていることがわかる。この異常値を除いて考えると、出席率と合格率にはある程度の相関関係があることがわかる（出席率（1）でも出席率（2）でも、合格率との相関係数が0.3まで上昇する）。やはり、出席率のよい科目はある程度合格率もよくなっているのである。なお、異常値といっているのは、相関係数を計算するときの個々の値で、他と離れたところに位置するものがあるというだけであつて、こうした合格率の出し方が異常であると言っているわけではない。主題科目も共通科目も、語学系の科目とは異なり、学生が自由に選択できる科目であり、もしそうした方針を繰り返していたら、学生には伝わるであろうし、それに学生が納得できないなら、受講しないという態度が取れるからである。もっとも、受講生を少なくするために合格率を意図的に低くするとすれば、それはそれで問題があるであろうが。

最後に、合格率とAの率は、相関係数が0.3以上あり、「関係がないとはいえない」程度の相関がある。

2. 各科目グループ毎の特徴

学生は、まず主題科目から履修する（履修のしばりが主題科目の方が強いからであつて、主題科目の方に興味があるからということでは必ずしもない）から、その登録者数が多い。但し、主題A・B・C間では、あまり大きな違いはない。これに対して、共通科目では、共通自然が登録者が多く、共通人文と共通社会をかなり引き離している。

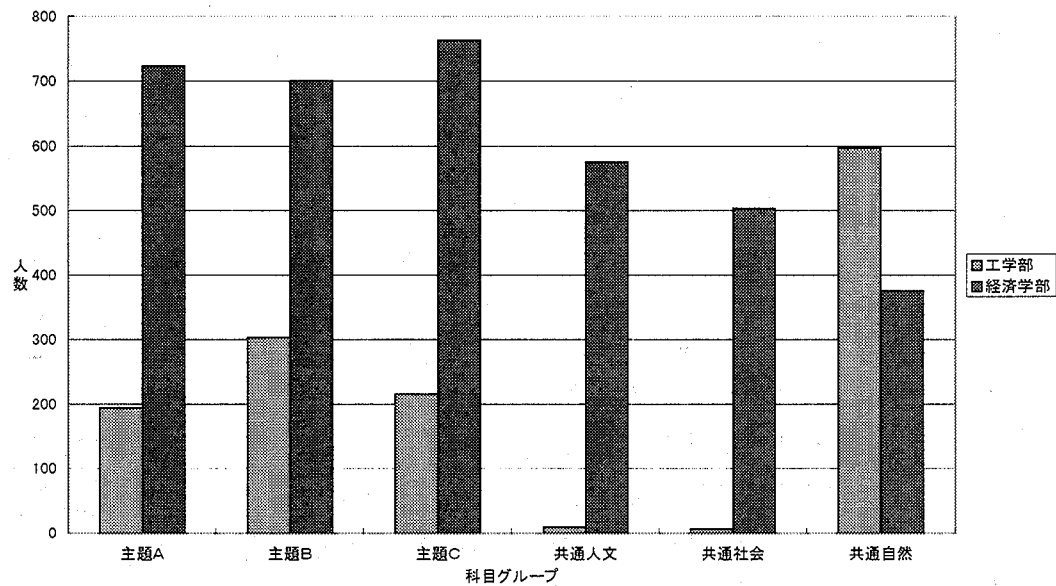
次に、出席率をみてみよう。主題Aの出席率は低く、主題Cが高い。主題Cが「人文・社会・自然に関する各学問系列の特性に見合った主題」となっているから、学生にとって興味を持ちやすい

のかもしれない。共通科目では、共通自然が高く、共通社会が続き、共通人文が最も低い。おそらく、自然科学系の授業は出席しないと単位が取れないということだろう。

受験率をみると、どれも80%台に到達しており、かなり高い。合格率は、グループ間で大きな差は見られないが、共通人文だけが70%台で少し低くなっている。Aの率は主題Bが比較的高くなっている。

3. 各学部毎の特徴

まず、各学部の登録者数から出てくる特徴を指摘しなければならない。Ⅶに詳しく掲載した表もみてもらうこととして、ここでは、図Ⅱ-2をみていただきたい。



図Ⅱ-2 工学部と経済学部の各科目別登録者

図は、典型的な履修の仕方をしている経済学部の学生と比較しているが、工学部の学生は、ほとんど共通人文と共通社会を登録・履修していないことがわかる。登録者数で、いずれも10名を切っている。その代わり、圧倒的に共通自然の登録が多くなっている。ここでは掲載しないが、共通自然のなかでは、数学と物理学を履修しており、化学や生物学や地学はほとんど履修していない。2年生になったら、化学や生物学や地学を履修し、また、共通人文や共通社会といった科目も履修するのかもしれないが、1年生の教養教育の履修の仕方としては、明らかにバランスを欠いたものとなっている。どのような履修指導がなされているかわからないが、こうした現状は、教養教育のあり方、更には大学教育のあり方からみると、きわめて異常なことであるといわなければならない。

農学部の学生もこうした傾向が強い（農学部の場合は、共通自然のなかでは、化学や生物学や地学が中心となっている）が、異常というほどではなく、この程度なら理系の学部であるという特徴が出ているということであろう。図Ⅱ-3参照。

これに対して、教育学部・法学部・経済学部は全く逆で、共通人文や共通社会の登録者が多く、共通自然は少なくなっている。なかでも、法学部では共通自然の登録者がかなり少ない。それでも、この程度なら、農学部の履修とは対照的に文系の学部であるという特徴が出ているということであろう。教育学部と経済学部では、平均的にどの科目にも登録しており、さまざまな興味をもった学生

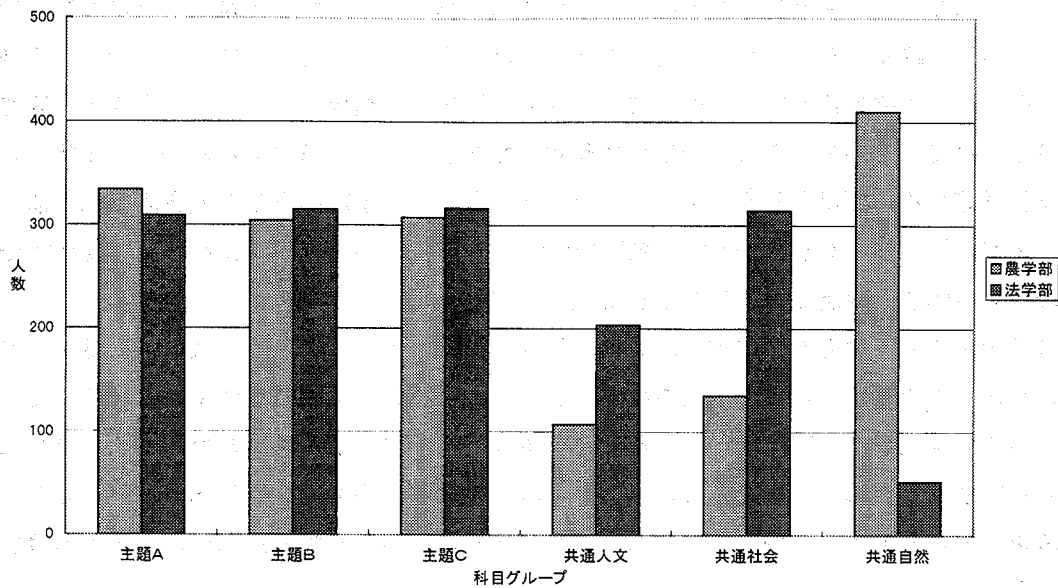


図 II-3 農学部と法学部の各科目別登録者

がさまざまな科目を履修しているというバラエティがあり、標準的な履修の仕方になっているといっ
てよい。先に、科目グループ毎の特徴を見た時、共通自然が共通人文や共通社会と比較して登録者
が多いと指摘したが、それは全体の傾向ではなく、工学部の学生の極端な履修状況がそうした差を
生んだ理由であることがわかる。

次に、出席率をみてみよう。出席率をもっともよい学部は法学部である。そして、二つの出席率
をみて、一番悪いのは経済学部である。図 II-4 参照。法学部と経済学部の出席率 (1) (2)
での8%の差は、教官の間では古くから言われてきたことであり、それがこのデータによって確認
されたということであろう。

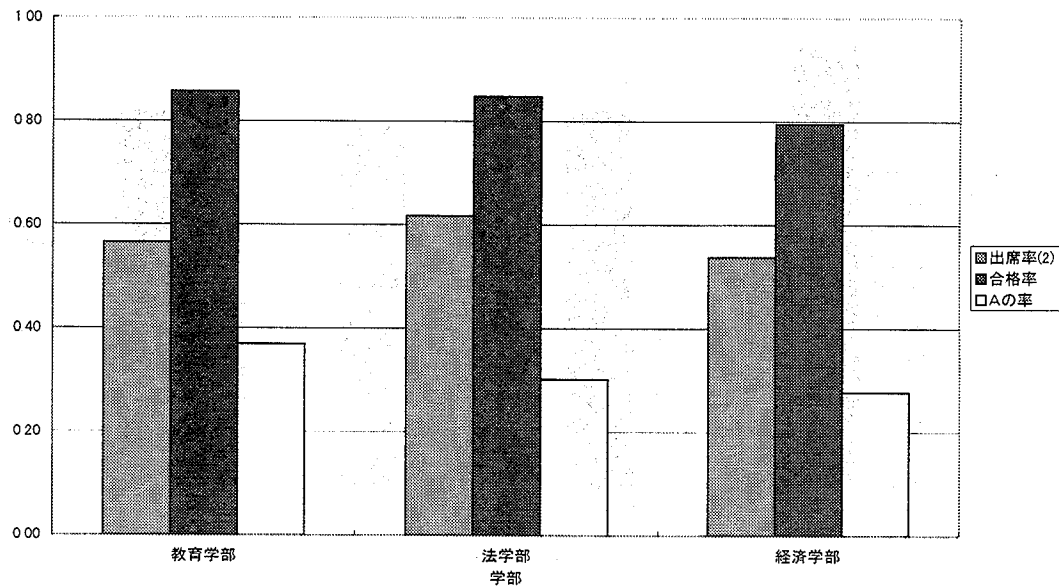


図 II-4 教育学部と法学部と経済学部の比較

合格率は、教育学部と法学部がよくて、経済学部・農学部・工学部はそれと比較すると低い。し
かし、それでも経済学部の学生は、80%の合格率にはなっているから、あまりまじめに授業を出て
いないが、要領よくある程度の単位だけは取っているのであろう。経済学部らしい「経済的」な取

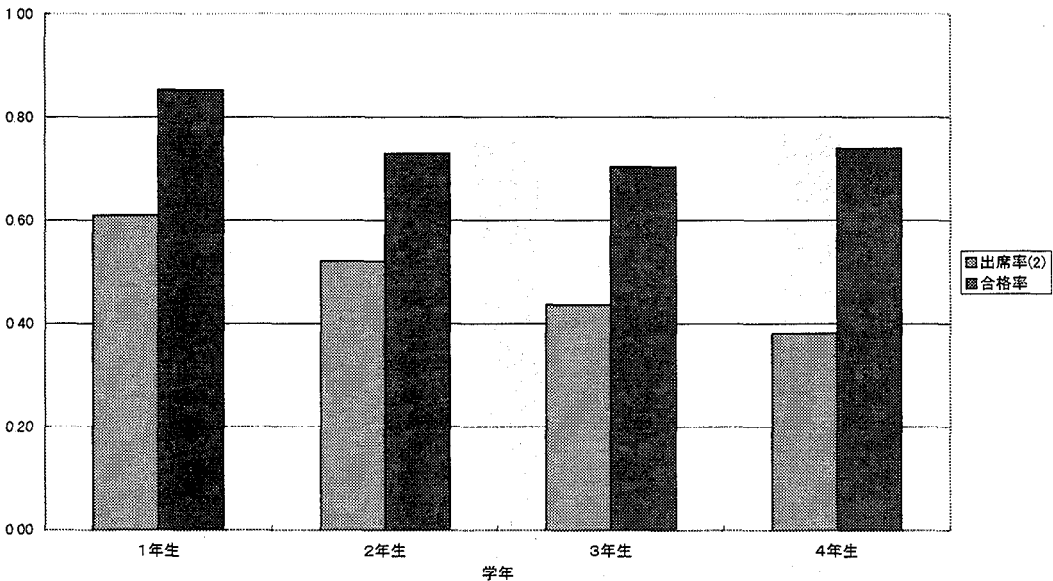
り方かもしれない。工学部の学生の場合、合格率は主題Cが高いが、主題AとBはかなり低い値になっている。合格率がそれでも平均的にみると経済学部や農学部と同じ位になるのは、主題Cの合格率が高いことが平均値を押し上げ、更に、共通自然を多く履修し、そこでの合格率の高さが平均値を押し上げているからである。合格率は理解の程度を示しているのであるから、主題AとBの低さは少し考慮する必要があるだろう。実は、後でみるように、工学部の学生の授業評価は、他の学部の学生に比べて低いのであるが、それは授業に満足していないことを意志表示しているわけであり、それは合格率の低さと関連していることとなる。

Aの率をみると、教育学部の学生が高い。教育学部の学生のなかには、よく出来る学生が多いというのいままでもよく言われてきた事実であるが、それがここで確認されている。そして、ここでも経済学部の学生が5学部のなかで一番悪い。単位だけは要領よく取ったが、要領だけではAは取れないということだろう。また、Aの率でいえば工学部が一番高い。工学部は1年生しかいないことも影響しているであろうが、ここでも、主題Cと共通自然でAの率が高いことが平均値を押し上げているのである。

4. 各学年毎の特徴

ここでも、詳細はⅦをみていただきたい。学年別の登録者数から確認しておくと、1年生：7166、2年生：2176、3年生：527、4年生以上：461であり、69%が1年生である。表から明らかなように、1年生は、主題科目を中心に履修しているのに対し、2年生以上になると、この傾向は逆転し、共通科目の履修が中心となることがわかる。ここには、学年の進行順に、まず、主題科目、続いて、共通科目という履修の仕方が見られる。

出席率と合格率をグラフにしたのが、図Ⅱ-5である。



図Ⅱ-5 学年の比較

出席率(2)をみると、非常に明確な傾向がみえる。即ち、1年生：0.61、2年生：0.52、3年生：0.44、4年生以上：0.38となっており、かなりの割合で低下していく。学年の進行とともに、学生の授業に対する態度が悪くなっていく傾向にある。1年生に対して2年生の出席率が10ポイント近く低下するのは、そうした理由であろうが、3・4年生の低下というのは、それに加えて、3

年次以上の履修生は単位が取れなかった学生であろうから、もともと出席率や合格率の悪い学生であり、そのため更に低下していくのだろう。

合格率は、2年生以上は70%台にあるが、1年生はそれより10ポイント以上高い。出席率が高いことと相応した結果がここには出ている。

以上のように、学年別の成績判定の特徴はほぼ予想通りであり、1年生がよくて、2年生以上は必ずしもよくないという結果になっている。

5. 授業回数

授業回数の平均値は、12.43であり、最大値は15、最小値は8である。実は、平均値を計算してもほとんど意味がない。必要なのは、あくまでも個々の授業が何回の授業を行ったかというデータであり、それがわれわれ大学構成員に周知されることである。経済学部が、教授会で回覧される自己評価のデータのなかで授業回数を掲載するようになったのは、そうすれば、休講ばかりの授業は結果として防がれるだろうと判断したからである。事実、休講が多い先生は、補講なりを実施して、全体の授業回数を平均値に近いところまでもっていこうとするようになった。

教育者としての倫理観に頼っていただけでは、教育はよくならない。他人の目を意識して、はじめてよくなっていくのである。ましてや、国立大学であるから、個々の教育はプライベートなことではない。学生や納税者に一定の義務をもちながら、教育をしているはずである。今回は、＜個々の情報は非公開である＞を原則として進めてきたから、個々の授業回数も非公開とするが、今後は少なくとも授業回数の分布は公開されるべきであろう。

Ⅲ 学生による授業評価

1. 基礎的データ

回答件数は、5280である。学部別にみると、教育：1163、法：812、経済：1680、工：665、農：787（無記名：173）である。表Ⅲ－1参照。

表Ⅲ－1

	全体	主題A	主題B	主題C	共通人文	共通社会	共通自然
教育	1163	168	227	184	229	212	143
法	812	152	188	182	101	166	23
経済	1680	288	359	387	220	220	206
工	665	73	160	140	4	2	286
農	787	143	158	164	45	61	216
無記名	173	32	37	43	21	17	23
計	5280	856	1129	1100	620	678	897

表Ⅲ－1の内容については、Ⅱで出席率等を分析するなかからすでに検討したので、ここでは省略することとする。

学年別のデータをみると、1年生：4087、2年生：898、3年生：163、4年生以上：121、無記名：11である。1年生の回答数が圧倒的に多い（全体の約4/5となっている）。Ⅱでみたように、登録者でみると、1年生が約70%であったから、登録数と比較すると、10ポイントも高く、1年生の出席率がよいことを裏付けている。

2. 評価 (1) ー全体ー

科目全体の平均値は、Ⅶでまとめて表示することとするが、ここでは、それをグラフにしたものでみることにしよう。図 Ⅲ－1 参照。

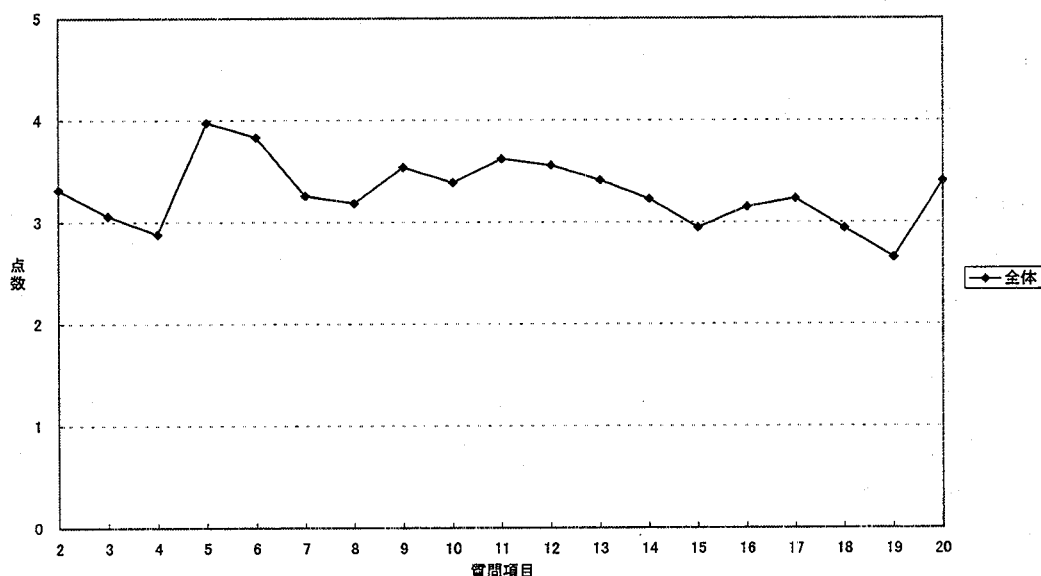


図 Ⅲ－1 平均値

全体の値は、3と4の間にあり、まあまあの評価がでていいといえよう。問(20)の総合的な満足度は、全体の平均で3.41になっている。個別的な質問事項でみると、評価が高いのは、(5)や(6)であり、(11)である。休講が少なく、開始・終了時間が適切であり、教育に熱心であるという評価になっている。逆に、評価が低いのは、(4)や(19)であり(3点をきっていて)、理解するのが難しいとか、どうもよい成績が取れそうにないという評価になっている。(15)も低いが、専門との関連が必ずしもわからないという意見である。しかし、(15)が低いのは、教養教育としてはやむを得ないところもある。したがって、全体的な評価としては、先生は熱心に教えてくれているが、十分わかっているとは言えないし、よい成績も取れそうにないところであろう。

また、最初の(2)～(4)の質問項目が右下がりになっていることは注目すべきであろう。この右下がりの傾向からは、＜最初は興味があったが、次第にやる気がなくなり、理解もできなくなっている＞という学生の姿が浮かび上がってくるからである。他方では、先生が熱心であるという評価は得られているから、その熱心さがもっとわかりやすい講義を心がける方向に向かったら、この(2)～(4)の右下がりの傾向を解消できるかもしれない。

次に、問2～問20までの評価項目の相関関係を調べてみよう。総合的な満足度とどの項目が関連があるかを調べることによって、総合的な満足度を上げるためには、どうしたらよいか少しはわかるからである。相関係数は、58科目の平均値で計算したもの(多くの場合、相関係数が高くなる傾向が見られる)とすべてのデータで計算したものを作ってみた。表が大きいのので、Ⅶに掲載することとした。二つの計算結果は若干異なっている。後にみるように、学部間や学年間で評価に若干の差がある。たとえば問20と問4にどの学部でも強い相関関係があったとしても、学部間で評価水準に差があると、相関係数は結果として低くなる。58科目で相関係数を取ると、こうした差は解消されることとなる。そこで、ここでは、58科目のデータで計算したもので分析しておこう。

まず、総合的な満足度である問20と相関係数が非常に高い項目を取り出してみよう。0.8を超えるものが、問16、問18、問4、問10、問13である（この順で高い）。ということは、満足度が高いためには、まず「よく準備され、わかりやすい授業である」（問10）ことが必要である。そうすれば「この授業はよく理解できている」（問4）こととなる。それ故「心に残る授業である」（問16）し、「この授業を受けて、学問に対する興味が増した」（問18）から満足したということになるであろう。そして、問13「受講生に適した水準の内容である」も高いから、「よく準備され、わかりやすい授業である」だけでなく、「受講生に適した水準の内容である」と、「この授業はよく理解できている」ということになるのだろう。

これに対して、満足度との相関関係が相対的に低いのは、問5、問6、問8、問14、問15である。「休講が少ない」とか「授業の開始・終了時間が適切である」という点は、満足度との相関は高くない。だからといって、教師側として休講が多くても構わないということになるわけでは決していない。問8は「私語を注意するなど」の項目であるから、教師としては、学生の満足度を高めるのではないかと考えがちであるが、現代の学生にとっては、私語をするかどうかは他人のことであり、授業に対する自分の満足度をあまり高めるものではないかもしれない。また、問15は「専門と有機的につながった授業である」という項目であるが、高くないので、学生は教養教育科目に専門とのつながりをそれほど求めているのかもしれないし、（問15とは対照的な質問項目である）問14の「人生や社会との関係を考えさせられる授業である」という項目も、満足度をそれほど高める項目ではないということになっている（5280個のデータでは、0.42という相関係数になっているが）。

問11「教育への情熱、熱意が感じられる」との相関係数は微妙な値になっている。これらのことからわかることは、休講が少ないとか、授業の開始・終了時間が適切であるとかといった項目はいうまでもなく、教師の教育への情熱の高さも、それだけでは学生の総合的な満足度を高めるものではないということである。それが、わかりやすい授業や受講生に適合した水準の授業というところに結実してはじめて満足度を大きく高めるということである。

ところで、58科目の相関関係でみると、問20と相関関係が高い項目である問4、問10、問13、問16、問18は、それぞれ相互に相関係数が高いものとなっていることがわかる。そこでは、ほとんどの相関係数が0.7以上となっている。逆に、高い値に印をつけていくと、それは、上に記した行と列が交差したところになっていて、それ以外の評価項目はそもそも関連性がそれほど高くないということになる。但し、問9と問10・問11とは、例外的に相関係数が0.7を超えている。「話し方は聞き取りやすい」と、それは「わかりやすい授業である」とか「教育への情熱、熱意が感じられる」ということにつながるようであるから、話し方には気をつけた方がよいであろう。

2. 評価（2）－各科目グループ毎の評価－

まず、図 Ⅲ－2をみてもらいたい。

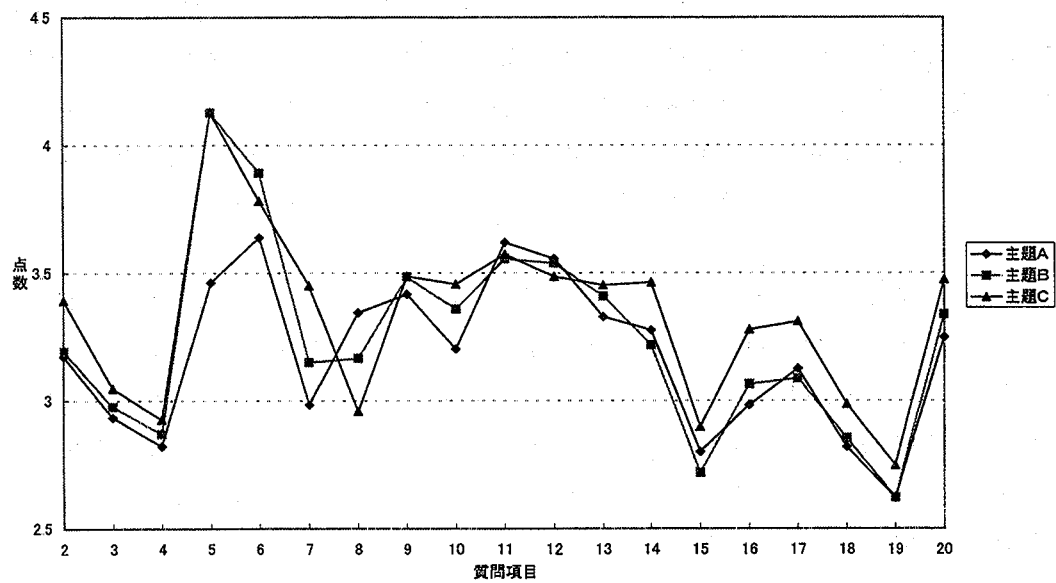


図 Ⅲ－2 科目グループの平均値

この図をみると、主題Cのグループが全体的に少し高く、主題Aのグループが質問項目（5）と（6）と（7）でかなり低くなっているが、大差はないといってよいだろう。

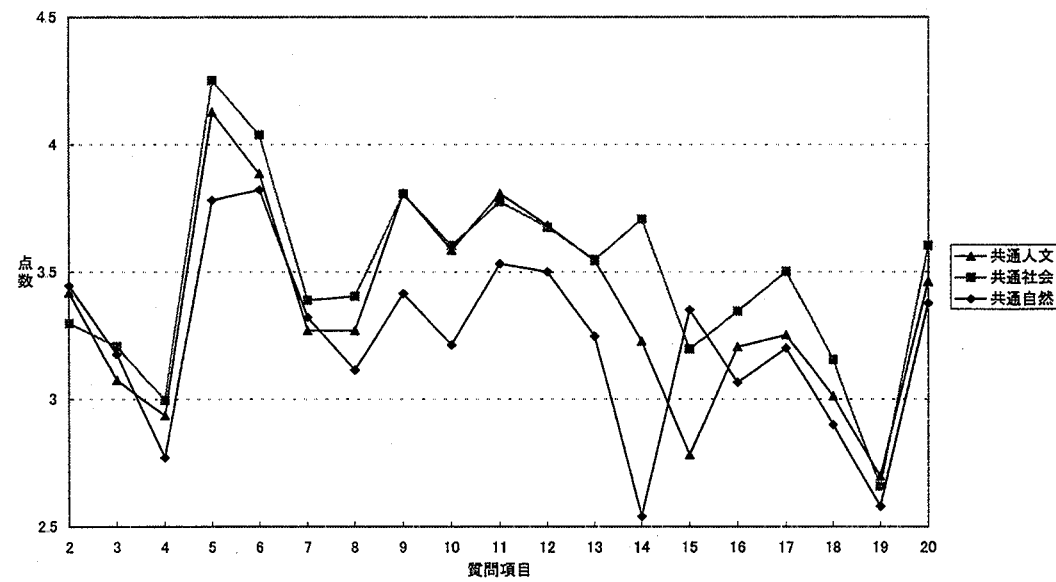


図 Ⅲ－3 科目グループの平均値

これに対して、共通科目ではグループ間で大きな差が出てくる。即ち、共通・人文と共通・社会が高い値を示しているのに対し、共通・自然が低くなっている。（14）の人生や社会との関連を考えさせるかどうかという質問項目では、当然違いが出ており、1段階の差がそこにはある。他方、（15）の専門との関連を問う質問項目では、逆に共通・自然が一番高い。このような（14）（15）という質問項目の差は、その理由が十分理解できるものであるが、それ以外の質問項目はグループ毎に差が出るような質問項目ではない。にもかかわらず、どの質問項目でも、明らかに共通・自然が低くなっ

ている。

ここで、共通科目グループ毎に評価がどのように分布しているかみてみよう。

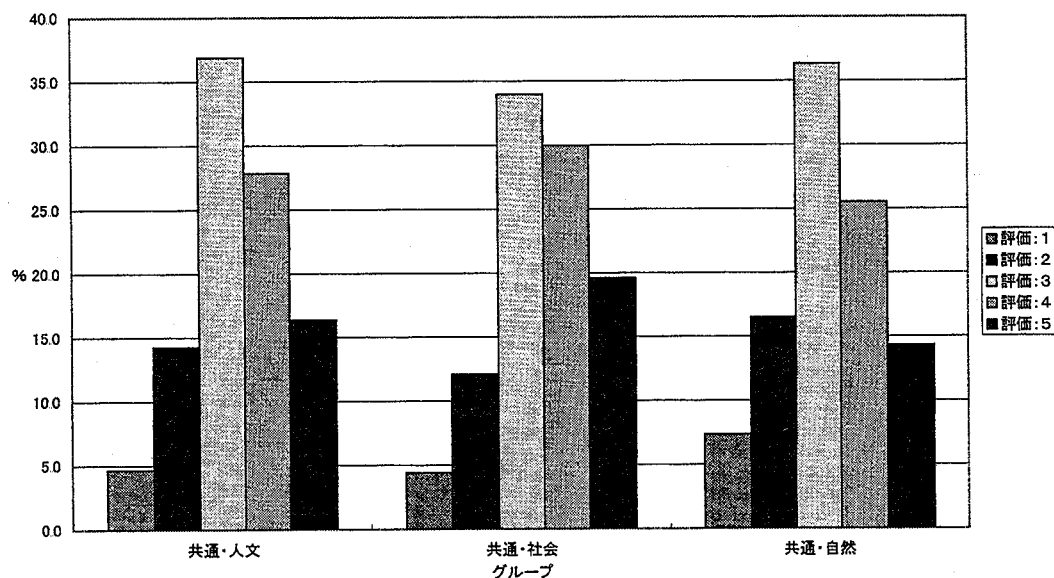


図 Ⅲ－４ 各共通科目グループの点数分布図

図 Ⅲ－４は、(2)～(20)までのすべての質問項目に対する回答が、それぞれのグループでどのように分布しているかをみたものであり、%表示で示している。自然科学分野の授業では、理解できる層と理解できない層に分裂して、そうしたばらついたデータの平均が結果として高いとか低いとかを示しているだけかもしれない。そうすると、平均値が高いか低いかだけを問題としても意味がないこととなる。ところが、図 Ⅲ－４をみると、評価3は共通科目のどのグループも30%台であまり変化はなく、違いは、共通・自然では、他のグループと比較して、評価1と評価2が多く（図では、評価3の左側）、評価4と評価5（図では、評価3の右側）が少ないものとなっている。とすると、共通・自然に対する評価が総体的に低かったと結論づけることができるだろう。

もう一つ注意すべきことは、問2～問4の動きである。58科目全体として、この三つの問が右がりであることはすでに指摘したが、この3共通科目グループを比較すると、共通・自然の角度が最も急だということがわかる。つまり、最初の興味は一番強くもっていたが、理解できなかったというのも一番強くなっているのである。期待と受講後の理解力との落差は、教師としては、最大限注意しなければならない問題であるからである。

4. 評価(3)－各学部毎の評価－

ここでも、全体の値は、Ⅶでまとめてみることにし、違いが非常に明確になる法学部と工学部の学生の評価を比べてみよう。図 Ⅲ－５参照。

評価がどの項目でも工学部学生の方が低い。(20)の総合的な満足度では、法学部学生が3.63であるのに対し、工学部学生は3.28であるが、この差はかなり大きいものである。こうした違いは、先にみた履修の仕方に影響されていることは明らかである。即ち、法学部の学生は、評価の高いグループである共通・人文や共通・社会を多く履修し、評価の低いグループである共通・自然をあまり履修していないのに対し（といっても、後にみるように、法学部学生の共通・自然に対する評価は実は高いのであるが）、工学部の学生はまったく逆で、共通・人文や共通・社会はほとんど履修してい

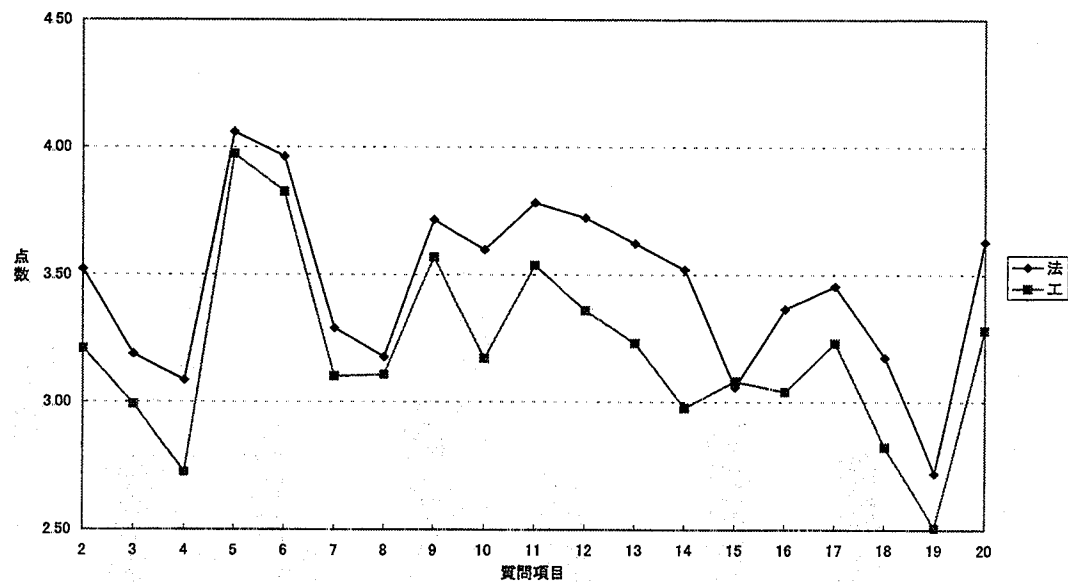


図 Ⅲ－5 学部間（法と工）の比較

ないのである。

但し、理由は、実はそれだけではない。もっと詳細に分析してみると、工学部の学生の評価はどの科目グループでも、法学部の学生と比較すると、低い評価しか与えていないのである。総合的な満足度である問（20）と、少し乱暴な計算であるが、19ある質問項目の平均値の平均を計算したものを示すと、表 Ⅲ－2 のようになる。

表 Ⅲ－2

	法学部学生		工学部学生	
	問(20)	平均	問(20)	平均
主題A	3.59	3.40	3.46	3.11
主題B	3.64	3.45	3.13	3.18
主題C	3.61	3.49	3.49	3.30
共通人文	3.55	3.42	3.50	3.29
共通社会	3.66	3.48	3.50	3.37
共通自然	4.09	3.55	3.21	3.18

工学部学生も共通・社会ではある程度高い評価を与えているが、履修（回答）者が圧倒的に少ないので、これらの値は全体の傾向にほとんど影響を与えていない。また、法学部学生の共通・自然に対する満足度が非常に高い。法学部が特別の履修指導をしているわけではないから、これは、興味をもった比較的少数の学生が履修（回答）しており、その興味の高さがそのまま満足度の高さにあらわれているのだろう。そして、それと比較すると、工学部学生の共通・自然に対する評価は明らかに低い。非常に対照的な形である。しかし、そうした共通科目の評価の差より、同じ主題科目の評価では、すべてのグループで法学部学生の方が高い評価を与えていることの方が重要であろう。工学部学生は1年生しかいないことが何らかの影響を与えているかもしれないが、工学部の学生は、全ての学部のなかで一番強い不満を表明していることは厳然たる事実である。それは、一つには履修指導の仕方から出てくるのかもしれないが、それだけに解消されない不満が（たとえば、まだ工学部のキャンパスがなく、学部としての一体感が感じられないといったことも影響しているかもしれないが）、この表からは浮かび上がってくるようである。

なお、授業に対する満足度は、授業の理解の程度によって影響されることは明らかである。した

がって、法学部の学生の方が理解度が高く、その分満足度も高いという可能性がある。そして、大学1年生がアンケートの回答の中心部分であるから、高校時代の基礎学力が大学の授業の理解度に何らかの影響を与えている可能性がある。香川大学のなかで、いわゆる偏差値が一番高いのが法学部であるから、こうした関係がここには表現されているのかもしれない。但し、大学教育の核心は、いうまでもなく大学入学時の成績にあるのではない。むしろ、4年間という教育課程のなかで、どこまで鍛え上げるかにかかっている。そうした大学教育の核心部分は、大学入学時の成績と入学後の学業成績を追跡調査することによってはじめて本格的に明らかにされるであろう。

5. 評価 (4) -各学年毎の評価-

圧倒的に1年生の回答が多いので、全体と1年生はあまり差がない。したがって、ここでは、1年生と1年生以外との差を問題とした方がよいであろう。1年生と2・3年生を比較すると、特別の違いは出てこないが、1年生と（数は少ないが）4年生以上を比較すると、4年生以上の方が明らかに評価が高いのである。図 Ⅲ-6 参照。

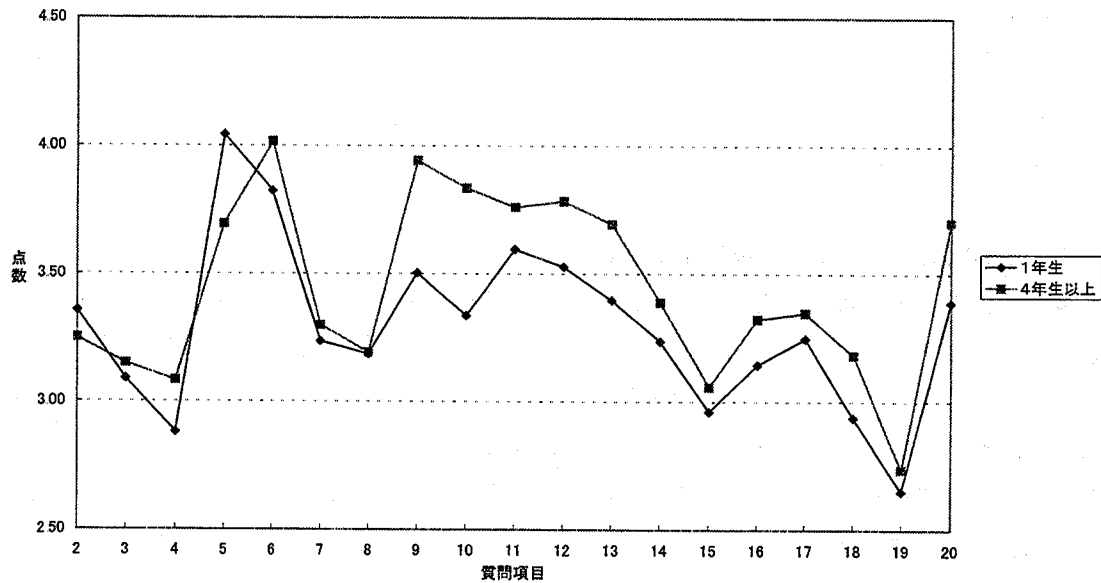


図 Ⅲ-6 1年生と4年生以上との比較

表 Ⅲ-3

	2	3	4	5	20
全体	3.31	3.06	2.88	3.98	3.41
1年生	3.36	3.09	2.88	4.04	3.39
2年生	3.17	2.95	2.85	3.76	3.44
3年生	3.16	2.88	2.96	3.69	3.49
4年生以上	3.25	3.15	3.08	3.69	3.70
無記名	2.91	2.73	2.36	4.64	2.91

4年生以上は卒業がかかっているもので、それだけ真剣になり、その分評価が高いかもしれない。しかし、それだけが原因ではないかもしれない。表 Ⅲ-3 は、質問項目の一部を取り出したものであるが、(20) の総合的評価では、学年が上がるほど、評価が高くなっている。3年生や4年生というのは、1・2年次で単位が取れなかった学生が主力であろうし、先にみたように、出席率も合格率もAの率も1年生と比較すると明らかに低かった。にもかかわらず、総合的評価が高いのである。こ

これは、予想していなかった結果である。可能性としては、大学そのものに慣れてきたとか、何度も聞いているうちにわかるようになったということだろう。しかし、学年が進行すると、専門教育を多く履修することとなるから、専門教育を履修してから教養教育を履修したから、教養教育をむしろ興味をもって聴講することができたという側面があるかもしれない。香川大学では、今後の検討課題として、教養教育と専門教育を分離するのではなく、むしろそれらを統合した＜4年一貫教育を実施する＞ということが提起されている。そうした問題を考える場合に参考となるデータかもしれない。

なお、表Ⅲ-3をみると、1年生が、問(2)(3)とりわけ(2)の項目では、他の学年の学生より高いことがわかる。つまり、1年生は、大学という新しい場で、どんな教育が行われるかに興味をもって参加しようとしていることがわかる。ところが、(この調査が半期を過ぎる頃であるから)やってみたらなかなか自分が思った通りにならなかったという実感をもったということであろう。これも、今後の教官側の反省材料としたらよいのではないだろうか。また、問(2)だけでなく、問(5)でも1年生が一番高い評価を与えている。大学入学したばかりの1年生は、大学というところはもっと休講が多いところだと思っていたのかもしれない。

どのデータでもそうであるが、学部や学年を無記名のものは、評価が低くなっている(表Ⅲ-3の問(5)は例外である)。まじめにアンケートに答えていない学生は、投げやりで低い評価しか与えていないようである。

6. 教官の成績判定等と学生の授業評価との関連

最後に、Ⅱの分析とⅢの分析の接点、即ち、出席率や合格率やAの率と学生による授業評価との関連性についてみてみることにしよう。いうまでもなく、学生による授業評価は、最後の授業かその1週間前に行っている。その後、期末試験があり、成績判定が行われている。したがって、出席率はともかくとしても、もし学生による授業評価を成績判定が出てその結果を学生が知った後に行うとすれば、合格率やAの率が学生の授業評価にかなり大きな影響を与えるであろう。しかし、ここでは試験より前に行っているから、学生による授業評価は成績判定から独立に行われていることとなり、両者の関連性をみる場合に偏りが無いものとしてみることができる。

求めた相関係数は、Ⅶに掲載した。まず、明らかなことは、相関係数が低いということである。高くても、0.3であり、この程度の数値であると、「関係がないとはいえない」という程度である。19の質問項目間の相関係数では、高いものでは0.8を超えるものが多くあったが、それとは対照的である。学生の総合的な満足度を示す問20は、合格率ともAの率とも、0.25、0.10でそれほど相関していない。問20と相関関係が強かった問16、問18、問4、問10、問13でも、同じようにあまり強く相関していない。もちろん、他の項目と比較すると、問20を含むそれらの項目(問18を除く)はすべて合格率と0.2~0.3程度の相関係数を示しているから、「関係がないとはいえない」程度のつながりはあることは事実であるが。

これらのことが何を意味するか。学生によって高い評価が与えられた授業は、必ずしも合格率が高いとかAの率が高いということではないということである。逆にみれば、次のようにも言えるだろう。多くの科目が毎年開講されているから(来年度から、教養科目が一新されるから、そうなる)と事情は少し異なってくるが)、学生が合格率の高低をまったく知らないということはないだろう。

1年生が主力であって、情報の伝達は上級生ほどではないであろうが、合格率の高低といった情報はそこそこ手に入れているはずである。すると、Aの率はともかくとして、合格率が高い科目には学生が殺到するであろう。そうした合格率が高くて受講生の多い科目だからといって、学生の授業評価が高いわけではないということである。もちろん、受講生が多い授業で評価が高いものもあるであろうが。

どちらからみても同じであるが、「単位取得が容易であるかどうか」と「授業が自分にとって満足できるものであったかどうか」とは、少なくとも学生にとっては別問題であるということである。教師としてみれば、学生による授業評価は自らの授業の反省材料として十分受けとめるべきであるが、それと成績判定と連動させる必要はない、学生に右顧左眊する必要はないということになる。右顧左眊するようであれば、授業評価も低いものとなる可能性もあるということになる。

更に、出席率と授業評価の関係も、あまり相関係数は高くない。「関係がないとはいえない」程度のものを取り上げると、問3「この授業に意欲的に取り組んでいる」と問7「教材・機器の使い方が効果的である」という項目とはプラスの関係があり、問6「授業の開始・終了時間が適切である」という項目とはマイナスの関係がある。問3や問7とのプラスの相関は当然として、問6のマイナスの相関は意外な感じもするが、教養科目は1時限目開講科目が多い。8時50分にきちんと授業を開始すると、少し寝坊な学生はもうあきらめて欠席してしまうのかもしれない。だからといって、開始を遅らせても、学生はその分また遅れてくるだけだから、効果はないであろうが。

IV 個別授業科目の分析例

1. 「社会学E1」（安井修二・細川滋担当）

まず、成績判定等のデータからみてみよう。表 IV-1 と表 IV-2 は、後に比較分析する3授業科目のものをまとめて表にした。この表の最後の行が、社会学E1である。

表 IV-1

	登録(総)	出席者	受験者	合格者	A
情報と経済	290	107	243	118	28
歴史学M	314	101	280	206	61
社会学E1	66	37	47	33	6

表 IV-2

	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率
情報と経済	0.369	0.440	0.838	0.486	0.237	0.263	0.500	0.514
歴史学M	0.322	0.361	0.892	0.736	0.296	0.272	0.432	0.264
社会学E1	0.561	0.787	0.712	0.702	0.182	0.242	0.576	0.298

まず、あらかじめ次の点を注意しておきたい。「社会学E1」と「社会学E2」という授業科目は、一般教育時代には「社会科学概論」という講義題目で、経済学部で教官が担当してきた授業科目である。したがって、いわゆる社会学とは異なり、経済学を中心とした社会科学系の学問を学ぶための入門をめざした科目である。平成11年度からは廃止されることとなるが、平成8～10年度までは3人（途中で花井教官が九州大学に転任されたので、2人となったが）で担当することとなっていた科目であった。

表 IV-1 をみると、「社会学E1」の登録者が非常に少ないことがわかる。この傾向は、はじめた時から一貫している。担当者としては理由がよく理解できていない。シラバスに書かれたことに興味を持ってくれないとすれば、どうすることもできないのではないかというのが正直な感想である。表 IV-2 をみると、「社会学E1」は、受験率は高くないが、出席率はかなり高い科目であることがわかる。科目自体が上に述べたような経緯があり、経済学部色（または専門教育との関連）が強い科目である。したがって、受講してみて少し難しくて脱落していった部分が多い科目である。ただ、出席率も高いので、単位を取得しようとする、まじめに授業に出ておく必要があると認定されていた科目であるということにもなる。合格率は大体7割であり、この値は出席率（2）の8割強であるから、普段出席していた学生には単位認定したというところである。

Aの率は低く、Cが6割を占める。事実上、CとXのぎりぎりのところに多くの学生がいて、Xに相当する学生を救済したところがあるから、このような数値になっている。残念ながら、よく理解してくれたのは一握りの学生でしかなく、ほとんどの学生には理解が難しかったというところであらう。

このような成績判定等のデータに対して、学生は「社会学E1」にどのような評価を与えているのであろうか。この科目の評価については、まず二つのグラフをみていただきたい。図 IV-1 と図 IV-2 参照

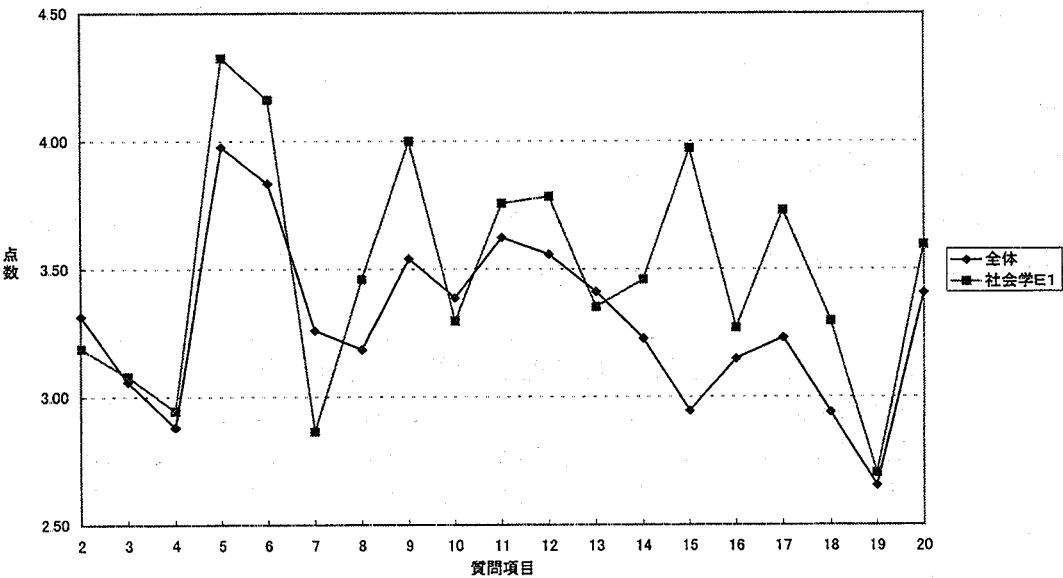


図 IV-1 全体と社会学E1 との比較

全体と比較した場合には、「社会学E1」の評価は、ほとんどの項目で全体より高い評価が得られている。ところが、共通・社会という平均的に高い評価が得られたグループと比較すると、高い項目もあれば低い項目もあるという評価になっている。(20)の総合的な満足度では、共通・社会が3.60であるのに対し、「社会学E1」は3.59であり、ほとんど同じ値であるといってよい。

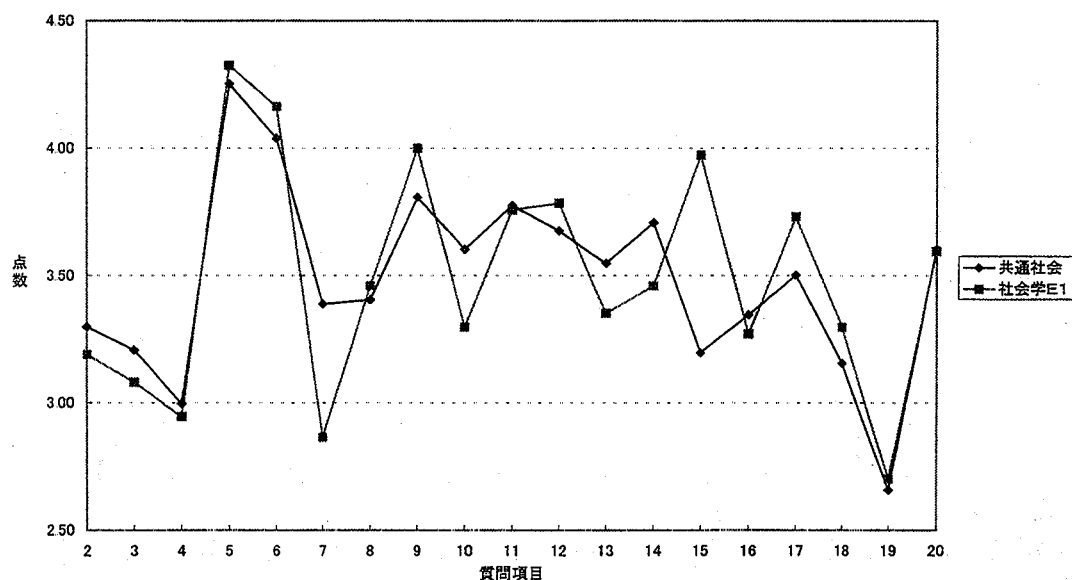


図 IV-2 共通社会と社会学E1との比較

問題は平均より高い評価と低い評価が何であるかである。ここでは、図 IV-2 の共通・社会との比較からみてみよう。低いのは、まず (7) である。この授業では、教材や機器を使わず、ほとんど板書だけで授業を進めたのでこうした評価になったのであろうが、この評価はやむをえないものであろう。それ以外で低い項目は、(10) (13) (14) である。準備のことはともかく、わかりにくい講義であり、受講生に適した水準とはいえないという厳しい評価である。どこかで専門的な知識を前提として話を進めていたのであろう。先の出席率や受講率や合格率やAの率等でみた傾向が、デマンド・サイドからの授業評価としても出てきたわけである。これは率直に反省すべき点である。

他方、高い評価は、(9) (15) (17) である。この授業は二人で担当しているが、(9) が高いのは、両方とも声の大きい方なので、居眠りをするのを妨げられるような話し方であったのであろう。これに対して、(15) (17) が高いのは、「社会科学概論」を受け継いだ授業であることが、そのまま学生による授業評価に反映しているといつてよい。

先にみたように、(14) は低い、(17) は高くなっている。大学で学んでいるという実感がわく授業ではあるが、人生や社会との関係を考えさせるほどのものではなかったという評価である。授業の内容は「歴史をどう読むか」「20 C とは何か」をテーマとしていたので、担当者としては、人生や社会との関係も考えさせるものになっただろうと思っていたが、そこまでの評価はしてくれなかったようである。

2. 3 授業科目の比較

ここでは、主題科目Bの「情報と経済」(経済学部・大野教官担当)と共通科目人文科学分野「歴史学M」(「第二次大戦下のフランス」—法学部・渡辺教官担当)と共通科目社会科学分野「社会学E1」(経済学部・安井・細川担当)の3科目で比較することとしよう。共通科目のなかでの社会科学分野と人文科学分野との比較であり、同じ経済学部担当者のなかでの共通科目と主題科目との比較である。なお、公平な評価を期すために、この3授業科目の担当者には、授業評価の結果を全学的に公表すること、そのことをあらかじめ覚悟した上で、授業を行い成績判定を行ってほしいということを要請した。いずれも快諾していただけた。

成績判定等の全体は、もう一度、表 IV-1 と表 IV-2 をみていただきたい。登録者数で、「情報と経済」と「歴史学M」は圧倒的に多い数になっている。300名近い数は、担当者には何も責任はないが、少し多すぎる数であろう。そのことが影響してか、両科目とも出席率はかなり悪い。出席率は悪いが、試験だけは受けている。合格率は、対照的である。「情報と経済」は、合格率が5割を切っているが、「歴史学M」は7割近い合格者を出している。A～Cまでの評価は似ているが、「社会学E1」はCが多く、Xになるべき学生を救済したことがこの数値に表れている。

次に、学部別のデータを取り出してみよう。

表 IV-3

	教育学部				法学部			
	登録者	受験者	合格者	A	登録者	受験者	合格者	A
情報と経済	22	16	7	0	14	9	5	1
歴史学M	56	47	38	10	87	78	64	21
社会学E1	4	2	1	1	15	11	10	2

	経済学部				工学部			
	登録者	受験者	合格者	A	登録者	受験者	合格者	A
情報と経済	111	91	45	10	118	106	52	16
歴史学M	163	149	99	29	0	0	0	0
社会学E1	45	33	21	3	0	0	0	0

	農学部			
	登録者	受験者	合格者	A
情報と経済	25	21	9	1
歴史学M	8	6	5	1
社会学E1	2	1	1	0

どの科目も、担当教官が所属する学部の学生が多く履修しているが、「情報と経済」だけは、工学部の学生が最も多く履修しているのが目立っている。合格者とかAの取得者とかに各学部別に特徴があるわけではない。

他方、学年をみると、大きな差がある。アンケートの回収結果から学年別のデータをみると、「情報と経済」はほとんど（95％）が1年生である。これに対して、「歴史学M」では、1年生の割合が76％になる。そして、「社会学E1」は1年生の割合が57％になり、逆にいうと、43％、2/5以上が2年生以上となっている。これは「社会学E1」が従来からある「社会科学概論」を受け継いでいるからであるが、全体の傾向でみたように、2年生以上が多いほど評価が高くなっている。この点から「社会学E1」の評価が高くなることが想像される。

3授業科目の評価をグラフに示したのが、図 IV-3 である。予想通り、「社会学E1」が高い評価を得ている。問（14）～（20）まではほとんど「社会学E1」が最も高い評価となっている。（20）の総合的な満足度でみると、「情報と経済」：3.23、「歴史学M」：3.28、「社会学E1」：3.59 という値になっている。

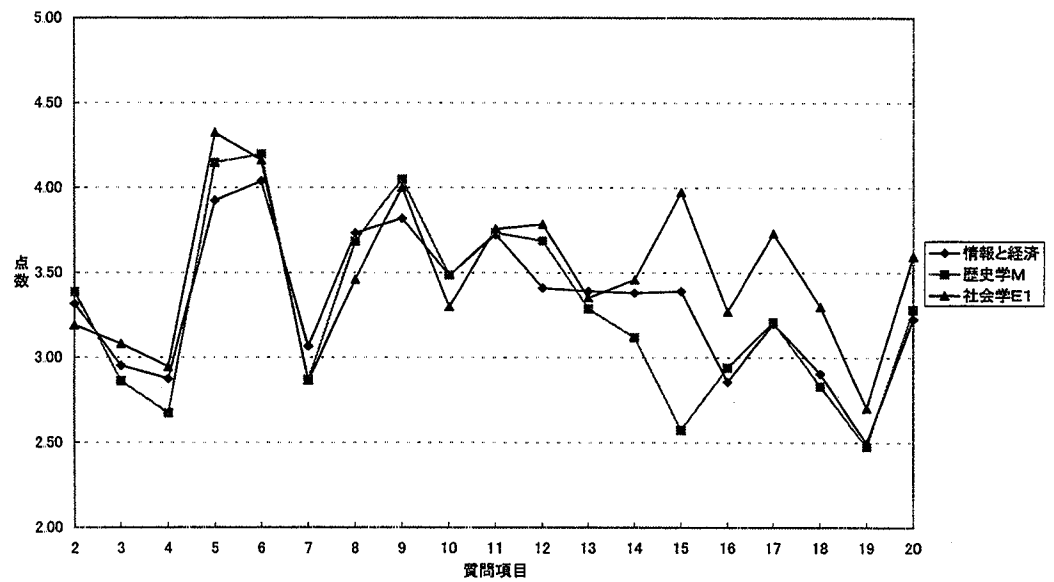


図 IV-3 3科目の比較

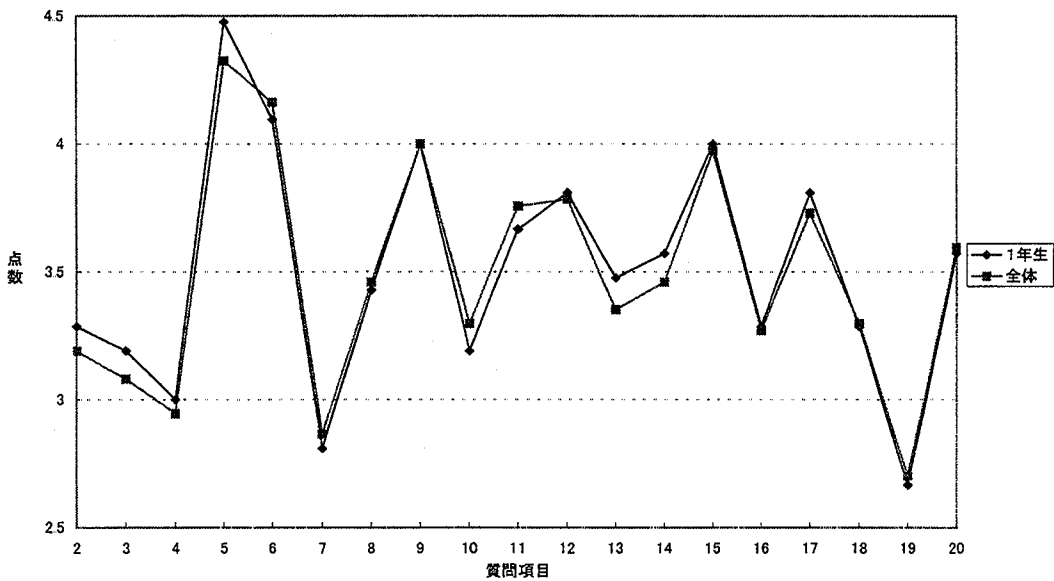


図 IV-4 社会学E1の全体と1年生との比較

そこで、「社会学E1」のなかでの学年による違いをみてみよう。それが、図 IV-4である。これをみると、実は、「社会学E1」の履修（回答）者全体と1年生の履修（回答）者の間に明確な違いは見られない。他の学年はここでは掲載しないが、2年生は全体より高く、4年生は全体より低い評価を与えている。そして、3年生と4年生をあわせると、全体とあまり変わらないこととなるから、図 IV-4のように、全体と1年生もあまり変わらないこととなるのである。要するに、「社会学E1」の2年生以上が多いことが、その評価を高めたというわけではないのである。履修（回答）者の学部の違いや学年の違いが、評価の差の原因でないとすると、評価の差の原因を求めるには、授業のテーマやそのやり方について検討してみなければならないだろう。そのためには、学生が自由回答で書いている内容を検討しつつ、担当者が集まってディスカッションしてみることが必要であろう。

なお、問（10）では「社会学E1」が一番低くなっているの、わかりにくい講義であったという評価も、他方ではあったということになる。

V おわりにー今後の課題ー

残された課題は次の通りである。

第一の問題は、こうした授業の評価をどの程度まで公開するか、公開するとすれば、どのように公開していくかという問題である。今回は最初の実験ということで、個人情報、学内教官への公開も含めてすべて公開しないという前提で参加してもらった。今後こうした作業を続けるとすれば、公開の問題を避けて通るわけにはいかないだろう。

1. 経済学部では、個別教官の成績判定等のデータはすべての教授会構成員に公開されている。これを学生等に全面的に公開していくとすれば、単位の出やすい科目に学生の履修が集中するのではないかという心配が出てくることだろう。しかし、同時に、単位がでやすい講義だけに学生が満足するかどうか、単位がでやすいため学生が集中することに教官が満足するかどうか、それらのことはすべて個人的な判断に任せたらよいという意見も出てくることだろう。

2. 学生による授業評価では、学生だけがA、B、C、Xの4段階評価を受けるのではなく、教官も同じように5段階評価を受けることとなる。人気投票のような形になり、学問の探究という観点からは必ずしも望ましくないという意見もあろう。しかし、同時に、これは学生の参加によってはじめて実現するものであるから、何らかの形で参加した学生にも還元すべきではないかという意見もあろう。

公開の問題は、最終的には自己評価委員会で結論を出していただくこととなる。

第二に、今後いかに継続していくかという点である。こうした試みが1回限りのものであるとすれば、これから「冬の時代」をむかえると言われている大学としては、今後生き残ることが難しくなるであろう。その意味で何らかの形で継続していくことが必要である。継続性の問題を考える場合には、費用と労力の問題を避けることはできない。費用と労力もリンクしており、仕事の多くを外注すれば、労力は少なくて済むが、その分費用がかかる。逆は逆である。

学業成績からデータを取り出すことについては、すでに経済学部がやってきたプログラムがあり、それを今回手直すことによってデータの取り出しができたので、今後は特別の費用や労力はかからないといっていよいだろう。もっとも、これは Excel ファイルで渡されるから、今回のように、その情報をすべて公開せず科目グループ毎のデータに整理するとなると、Excel 上のいくつかの作業が必要となる。経済学部がやっているように、教官が成績評価等で行っていることはプライベートなことではないという立場に立てば、少なくとも教官相互にはすべて公開したらよいであろう。それなら、事務官の Excel 上の作業はほとんどなくなるであろう。

そうすると、残るは、学生による授業評価のデータの処理の方である。費用と労力の負担を大きくしないでおおかつ継続的に行うとすれば、二つのことが考えられる。

1. 個別教官が行う分析を複雑にしないで、誰でもできる程度の分析（たとえば表計算が使える程度なら誰でもできる程度の分析）に限定すべきではないか。今回は、そのことをかなり意識して作業を行った。

(1). 事務官の仕事 5280件のデータの業者への入力依頼は、7万円強で済ませることができた。この入力作業だけは業者に依頼する以外にない。したがって、前期と後期に同じ規模のものを繰り返すとすれば、年間15万円ほどの費用で済むこととなる。問題は、TXT ファイルに入ったデータの処理を大学内でいかに行うかである。事務機構の仕事が多忙をきわめていることは周知の事実であるが、全体のデータを処理し（その処理のなかには、学生の授業評価の平均値を計算するとい

うところまで含まれているが)、個別教官に個別データが入ったフロッピーと個別の回答票を返すところまでを事務官の作業量と考えた。この作業を特別にコンピュータに詳しくない人間でもできるようにする。そのために、作業をマニュアル化する。これが、今回最も配慮した点である。

(2) 個別教官の仕事 以上のような処理が行われた後は、個別教官の仕事である。個別教官は、本報告書IVでやっている程度の分析—平均値と比較して、どこが高いか、どこが低いかな—を行うだけで十分ではないか。いたずらに複雑な分析をしても、授業のやり方を改めるのに役に立つとはいえないのではないか。

2. 費用と負担を増やさないためには、もう一つ、すべての科目を毎年実施しないで、ローテーションを組んでいくことがよいであろう。今回は、主題科目と共通科目に限定したが、後期に語学を実施し、全体のローテーションを考えてみてはどうであろうか。

第三に、本報告書が行ったような分析をどのように考えるかである。個別の授業ではなく、全体の教養教育のあり方を検討することは、教養教育調査研究委員会の仕事となる。ただ、そうした仕事は、たとえば教養教育体制の再構築のような場合に必要となることであつて、日常的にいつも必要なことではない。データ自身はきちんと保管しておく必要があるが、たとえば本報告書で行ったような分析がいつも必要になるわけではないのである。その意味では、個別授業の改善のために使用するというのは授業評価の基本としなければならない。そうすれば、必要なコストと労力も最小限に節約され、授業評価の継続性も実現していくこととなろう。

(文責：安井修二)

VI アンケート票

学生による授業評価

授業科目名

所属学部：教育・法・経済・工・農（いずれかに○をつけて下さい）

（ ） 学年

授業への出席回数

回

(1) この授業に何回出席しましたか。

以下の各項目について、次の5段階評価から1つ選び、その番号を右端の空欄に記入して下さい。

- 非常にそうである・・・5

あまりそうでない・・・2

かなりそうである・・・4

全くそうでない・・・1

どちらともいえない・・・3

授業への取り組み

- (2) この授業科目はもともと興味があった科目である。

(3) この授業に意欲的に取り組んでいる。

(4) この授業はよく理解できている。

先生の教え方

- (5) 休講が少ない。

(6) 授業の開始・終了時間が適切である。

(7) 教材・機器の使い方が効果的である。

(8) 私語を注意するなど、学問をする雰囲気を保つ配慮がなされている。

(9) 話し方は聞き取りやすい。

(10) よく準備され、わかりやすい授業である。

(11) 教育への情熱、熱意が感じられる。

授業の内容

- (12) シラバスの「意義」と「ねらい」に合致した授業である。

(13) 受講生に適した水準の内容である。

(14) 人生や社会との関係を考えさせられる授業である。

(15) 専門と有機的につながった授業である。

授業を受けての率直な感想

- (16) 心に残る授業である。

(17) 「大学で学んでいる」と実感がわく授業である。

(18) この授業を受けて、学問に対する興味が増した。

(19) よい成績が取れそうだ。

満足度

- (20) 総合的に判断して、この授業に満足している。

自由回答欄（授業に対する意見があれば自由に書いて下さい）

VII 資 料

(1)成績判定等の資料

学部・学年計

教育学部 法学部 経済学部 工学部 農学部

1年生 2年生 3年生 4年生

(2)学生の授業評価のデータ

1. 評価の平均値
2. 学部別平均値
3. 学年別平均値
4. 法学部学生の各グループ別評価
5. 工学部学生の各グループ別評価
6. 3授業科目の平均値
7. 授業評価の各項目の相関係数
 - ①データ件数を5280とした場合
 - ②データ件数を58とした（科目毎に計算した平均値を使用する）場合
8. 成績判定と授業評価の相関関係

(1)成績判定等の資料

	学部計								
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	10330	5370	9124	7471	2430	2628	2413	1653	1206
主題A	1976	946	1858	1507	355	556	596	351	118
主題B	2040	1129	1856	1534	657	511	366	322	184
主題C	1932	1100	1710	1442	459	595	388	268	222
共通人文	1344	620	1130	854	302	181	371	276	214
共通社会	1358	678	1112	928	238	401	289	184	246
共通自然	1680	897	1458	1206	419	384	403	252	222

	学部計								
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.52	0.59	0.88	0.82	0.33	0.35	0.32	0.18	0.12
主題A	0.48	0.51	0.94	0.81	0.24	0.37	0.40	0.19	0.06
主題B	0.55	0.61	0.91	0.83	0.43	0.33	0.24	0.17	0.09
主題C	0.57	0.64	0.89	0.84	0.32	0.41	0.27	0.16	0.11
共通人文	0.46	0.55	0.84	0.76	0.35	0.21	0.43	0.24	0.16
共通社会	0.50	0.61	0.82	0.83	0.26	0.43	0.31	0.17	0.18
共通自然	0.53	0.62	0.87	0.83	0.35	0.32	0.33	0.17	0.13

	教育								
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	2261	1163	2061	1767	652	625	490	294	200
主題A	416	168	401	349	112	126	111	52	15
主題B	418	227	385	345	167	120	58	40	33
主題C	331	184	304	260	81	119	60	44	27
共通人文	450	229	396	306	136	56	114	90	54
共通社会	400	212	360	327	102	142	83	33	40
共通自然	246	143	215	180	54	62	64	35	31

	教育								
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.51	0.56	0.91	0.86	0.37	0.35	0.28	0.14	0.09
主題A	0.40	0.42	0.96	0.87	0.32	0.36	0.32	0.13	0.04
主題B	0.54	0.59	0.92	0.90	0.48	0.35	0.17	0.10	0.08
主題C	0.56	0.61	0.92	0.86	0.31	0.46	0.23	0.14	0.08
共通人文	0.51	0.58	0.88	0.77	0.44	0.18	0.37	0.23	0.12
共通社会	0.53	0.59	0.90	0.91	0.31	0.43	0.25	0.09	0.10
共通自然	0.58	0.67	0.87	0.84	0.30	0.34	0.36	0.16	0.13

	法学部								
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	1509	812	1316	1116	336	447	333	200	193
主題A	309	152	290	250	59	108	83	40	19
主題B	315	188	284	252	89	99	64	32	31
主題C	316	182	282	240	77	103	60	42	34
共通人文	203	101	169	141	46	38	57	28	34
共通社会	314	166	262	210	54	94	62	52	52
共通自然	52	23	29	23	11	5	7	6	23

法学部									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.54	0.62	0.87	0.85	0.30	0.40	0.30	0.15	0.13
主題A	0.49	0.52	0.94	0.86	0.24	0.43	0.33	0.14	0.06
主題B	0.60	0.66	0.90	0.89	0.35	0.39	0.25	0.11	0.10
主題C	0.58	0.65	0.89	0.85	0.32	0.43	0.25	0.15	0.11
共通人文	0.50	0.60	0.83	0.83	0.33	0.27	0.40	0.17	0.17
共通社会	0.53	0.63	0.83	0.80	0.26	0.45	0.30	0.20	0.17
共通自然	0.44	0.79	0.56	0.79	0.48	0.22	0.30	0.21	0.44

経済学部									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	3639	1680	3128	2486	689	884	913	642	511
主題A	723	288	678	545	118	204	223	133	45
主題B	700	359	631	510	218	162	130	121	69
主題C	763	387	662	552	137	229	186	110	101
共通人文	575	220	477	336	101	71	164	141	98
共通社会	503	220	377	298	54	125	119	79	126
共通自然	375	206	303	245	61	93	91	58	72

経済学部									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.46	0.54	0.86	0.79	0.28	0.36	0.37	0.21	0.14
主題A	0.40	0.42	0.94	0.80	0.22	0.37	0.41	0.20	0.06
主題B	0.51	0.57	0.90	0.81	0.43	0.32	0.25	0.19	0.10
主題C	0.51	0.58	0.87	0.83	0.25	0.41	0.34	0.17	0.13
共通人文	0.38	0.46	0.83	0.70	0.30	0.21	0.49	0.30	0.17
共通社会	0.44	0.58	0.75	0.79	0.18	0.42	0.40	0.21	0.25
共通自然	0.55	0.68	0.81	0.81	0.25	0.38	0.37	0.19	0.19

工学部									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	1324	665	1231	986	386	286	314	245	93
主題A	194	73	173	123	20	42	61	50	21
主題B	303	160	275	190	90	42	58	85	28
主題C	215	140	195	180	75	71	34	15	20
共通人文	9	4	8	5	3	0	2	3	1
共通社会	6	2	6	4	2	1	1	2	0
共通自然	597	286	574	484	196	130	158	90	23

工学部									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.50	0.54	0.93	0.80	0.39	0.29	0.32	0.20	0.07
主題A	0.38	0.42	0.89	0.71	0.16	0.34	0.50	0.29	0.11
主題B	0.53	0.58	0.91	0.69	0.47	0.22	0.31	0.31	0.09
主題C	0.65	0.72	0.91	0.92	0.42	0.39	0.19	0.08	0.09
共通人文	0.44	0.50	0.89	0.63	0.60	0.00	0.40	0.38	0.11
共通社会	0.33	0.33	1.00	0.67	0.50	0.25	0.25	0.33	0.00
共通自然	0.48	0.50	0.96	0.84	0.40	0.27	0.33	0.16	0.04

農学部									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	1597	787	1388	1116	367	386	363	272	209
主題A	334	143	316	240	46	76	118	76	18
主題B	304	158	281	237	93	88	56	44	23
主題C	307	164	267	210	89	73	48	57	40
共通人文	107	45	80	66	16	16	34	14	27
共通社会	135	61	107	89	26	39	24	18	28
共通自然	410	216	337	274	97	94	83	63	73

農学部									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.49	0.57	0.87	0.80	0.33	0.35	0.33	0.20	0.13
主題A	0.43	0.45	0.95	0.76	0.19	0.32	0.49	0.24	0.05
主題B	0.52	0.56	0.92	0.84	0.39	0.37	0.24	0.16	0.08
主題C	0.53	0.61	0.87	0.79	0.42	0.35	0.23	0.21	0.13
共通人文	0.42	0.56	0.75	0.83	0.24	0.24	0.52	0.18	0.25
共通社会	0.45	0.57	0.79	0.83	0.29	0.44	0.27	0.17	0.21
共通自然	0.53	0.64	0.82	0.81	0.35	0.34	0.30	0.19	0.18

1年生									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	7166	4087	6706	5714	1956	2028	1730	992	460
主題A	1635	765	1558	1324	324	490	510	234	77
主題B	1743	1026	1627	1376	595	459	322	251	116
主題C	1583	996	1458	1273	419	520	334	185	125
共通人文	530	303	497	394	138	84	172	103	33
共通社会	658	415	606	529	143	233	153	77	52
共通自然	1017	582	960	818	337	242	239	142	57

1年生									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.57	0.61	0.94	0.85	0.34	0.35	0.30	0.15	0.06
主題A	0.47	0.49	0.95	0.85	0.24	0.37	0.39	0.15	0.05
主題B	0.59	0.63	0.93	0.85	0.43	0.33	0.23	0.15	0.07
主題C	0.63	0.68	0.92	0.87	0.33	0.41	0.26	0.13	0.08
共通人文	0.57	0.61	0.94	0.79	0.35	0.21	0.44	0.21	0.06
共通社会	0.63	0.68	0.92	0.87	0.27	0.44	0.29	0.13	0.08
共通自然	0.57	0.61	0.94	0.85	0.41	0.30	0.29	0.15	0.06

2年生									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	2176	898	1726	1259	371	431	457	467	450
主題A	231	62	200	121	22	46	53	79	31
主題B	222	79	175	115	45	43	27	60	47
主題C	251	78	181	117	28	48	41	64	70
共通人文	533	242	443	329	137	66	126	114	90
共通社会	447	189	344	278	76	116	86	66	103
共通自然	492	248	383	299	63	112	124	84	109

2年生									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.41	0.52	0.79	0.73	0.29	0.34	0.36	0.27	0.21
主題A	0.27	0.31	0.87	0.61	0.18	0.38	0.44	0.40	0.13
主題B	0.36	0.45	0.79	0.66	0.39	0.37	0.23	0.34	0.21
主題C	0.31	0.43	0.72	0.65	0.24	0.41	0.35	0.35	0.28
共通人文	0.45	0.55	0.83	0.74	0.42	0.20	0.38	0.26	0.17
共通社会	0.42	0.55	0.77	0.81	0.27	0.42	0.31	0.19	0.23
共通自然	0.50	0.65	0.78	0.78	0.21	0.37	0.41	0.22	0.22

3年生									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	527	163	374	263	56	92	115	111	153
主題A	73	20	66	40	6	12	22	26	7
主題B	43	14	33	28	12	8	8	5	10
主題C	71	21	50	39	9	19	11	11	21
共通人文	125	36	88	54	13	11	30	34	37
共通社会	123	34	73	55	8	26	21	18	50
共通自然	92	38	64	47	8	16	23	17	28

3年生									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.31	0.44	0.71	0.70	0.21	0.35	0.44	0.30	0.29
主題A	0.27	0.30	0.90	0.61	0.15	0.30	0.55	0.39	0.10
主題B	0.33	0.42	0.77	0.85	0.43	0.29	0.29	0.15	0.23
主題C	0.30	0.42	0.70	0.78	0.23	0.49	0.28	0.22	0.30
共通人文	0.29	0.41	0.70	0.61	0.24	0.20	0.56	0.39	0.30
共通社会	0.28	0.47	0.59	0.75	0.15	0.47	0.38	0.25	0.41
共通自然	0.41	0.59	0.70	0.73	0.17	0.34	0.49	0.27	0.30

4年生									
	登録者	出席者	受験者	合格者	A	B	C	X	不受験者
総数	461	121	318	235	47	77	111	83	143
主題A	37	7	34	22	3	8	11	12	3
主題B	32	5	21	15	5	1	9	6	11
主題C	27	5	21	13	3	8	2	8	6
共通人文	156	37	102	77	14	20	43	25	54
共通社会	130	40	89	66	11	26	29	23	41
共通自然	79	27	51	42	11	14	17	9	28

4年生									
	出席率(1)	出席率(2)	受験率	合格率	Aの率	Bの率	Cの率	Xの率	不受験率
総数	0.26	0.38	0.69	0.74	0.20	0.33	0.47	0.26	0.31
主題A	0.19	0.21	0.92	0.65	0.14	0.36	0.50	0.35	0.08
主題B	0.16	0.24	0.66	0.71	0.33	0.07	0.60	0.29	0.34
主題C	0.19	0.24	0.78	0.62	0.23	0.62	0.15	0.38	0.22
共通人文	0.24	0.36	0.65	0.75	0.18	0.26	0.56	0.25	0.35
共通社会	0.31	0.45	0.68	0.74	0.17	0.39	0.44	0.26	0.32
共通自然	0.34	0.53	0.65	0.82	0.26	0.33	0.40	0.18	0.35

(2)学生の授業評価のデータ

1. 評価の平均値

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
全体	3.31	3.06	2.88	3.98	3.83	3.26	3.19	3.54	3.39	3.62	3.56	3.41	3.23	2.95	3.15	3.23	2.94	2.65	3.41
主題A	3.17	2.93	2.82	3.46	3.64	2.98	3.34	3.42	3.20	3.62	3.56	3.33	3.28	2.80	2.98	3.13	2.82	2.62	3.25
主題B	3.19	2.98	2.87	4.13	3.89	3.15	3.17	3.48	3.36	3.56	3.54	3.41	3.22	2.72	3.06	3.09	2.85	2.62	3.34
主題C	3.39	3.05	2.93	4.13	3.78	3.45	2.96	3.49	3.46	3.57	3.48	3.45	3.46	2.90	3.28	3.31	2.99	2.75	3.47
共通人文	3.42	3.07	2.94	4.13	3.89	3.27	3.27	3.81	3.59	3.81	3.68	3.54	3.23	2.78	3.21	3.25	3.01	2.70	3.46
共通社会	3.30	3.21	3.00	4.25	4.04	3.39	3.40	3.81	3.60	3.77	3.68	3.55	3.71	3.20	3.35	3.50	3.15	2.66	3.60
共通自然	3.45	3.18	2.77	3.78	3.82	3.32	3.11	3.41	3.21	3.53	3.50	3.25	2.54	3.35	3.07	3.20	2.90	2.58	3.38

2. 学部別平均値

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
全体	3.31	3.06	2.88	3.98	3.83	3.26	3.19	3.54	3.39	3.62	3.56	3.41	3.23	2.95	3.15	3.23	2.94	2.65	3.41
教育	3.22	3.01	2.78	4.06	3.90	3.29	3.25	3.50	3.33	3.61	3.54	3.34	3.25	3.03	3.10	3.23	2.91	2.59	3.36
法	3.52	3.19	3.09	4.06	3.96	3.29	3.18	3.72	3.60	3.78	3.72	3.62	3.52	3.06	3.36	3.45	3.18	2.72	3.63
経済	3.30	3.04	2.91	3.93	3.74	3.29	3.17	3.50	3.39	3.61	3.57	3.44	3.19	2.72	3.11	3.11	2.89	2.75	3.38
工	3.21	2.99	2.73	3.97	3.83	3.10	3.11	3.57	3.17	3.54	3.36	3.23	2.98	3.08	3.04	3.23	2.82	2.51	3.28
農	3.34	3.09	2.88	3.89	3.82	3.26	3.23	3.49	3.42	3.57	3.55	3.38	3.17	3.04	3.18	3.25	2.97	2.61	3.40
無記名	3.33	3.01	2.86	3.99	3.87	3.21	3.03	3.38	3.35	3.64	3.56	3.37	3.28	3.02	3.07	3.24	2.90	2.59	3.36

3. 学年別平均値

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
全体	3.31	3.06	2.88	3.98	3.83	3.26	3.19	3.54	3.39	3.62	3.56	3.41	3.23	2.95	3.15	3.23	2.94	2.65	3.41
1年生	3.36	3.09	2.88	4.04	3.82	3.24	3.19	3.50	3.34	3.60	3.53	3.40	3.24	2.96	3.14	3.25	2.94	2.65	3.39
2年生	3.17	2.95	2.85	3.76	3.86	3.36	3.19	3.67	3.54	3.73	3.66	3.44	3.18	2.87	3.16	3.16	2.92	2.63	3.44
3年生	3.16	2.88	2.96	3.69	3.87	3.31	3.18	3.58	3.52	3.64	3.57	3.42	3.22	2.85	3.13	3.20	3.02	2.81	3.49
4年生以上	3.25	3.15	3.08	3.69	4.02	3.30	3.19	3.94	3.83	3.76	3.78	3.69	3.39	3.06	3.32	3.35	3.18	2.74	3.70
無記名	2.91	2.73	2.36	4.64	3.64	2.64	2.82	2.45	2.82	3.18	3.73	3.45	2.73	2.82	2.82	2.45	2.00	2.09	2.91

4. 法学部学生の各グループ別評価

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
法・主題A	3.43	3.06	3.13	3.68	3.78	3.05	3.38	3.67	3.45	3.82	3.79	3.59	3.54	3.11	3.28	3.45	3.11	2.67	3.59
法・主題B	3.61	3.26	3.13	4.15	4.11	3.14	3.02	3.50	3.61	3.69	3.73	3.66	3.46	3.11	3.38	3.38	3.18	2.73	3.64
法・主題C	3.49	3.14	3.17	4.18	3.96	3.51	3.10	3.70	3.67	3.75	3.64	3.69	3.74	3.18	3.40	3.51	3.17	2.79	3.61
法・人文	3.56	3.16	2.99	4.03	3.97	3.25	3.26	4.09	3.69	3.80	3.72	3.54	3.13	2.73	3.21	3.35	3.08	2.77	3.55
法・社会	3.45	3.26	2.98	4.23	3.95	3.42	3.21	3.76	3.56	3.84	3.72	3.56	3.66	3.08	3.46	3.54	3.25	2.63	3.66
法・自然	4.04	3.52	2.96	3.74	4.09	3.65	3.13	3.96	3.78	4.04	3.91	3.70	2.87	2.65	3.52	3.57	3.52	2.78	4.09

5. 工学部学生の各グループ別評価

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
工・主題A	2.93	2.88	2.69	2.63	3.74	2.75	3.32	3.76	3.29	3.76	3.40	3.26	3.23	2.18	3.14	3.33	2.76	2.54	3.46
工・主題B	3.14	2.77	2.74	3.97	3.87	3.29	3.35	3.69	3.29	3.45	3.38	3.23	3.21	2.77	2.86	3.01	2.75	2.50	3.13
工・主題C	3.34	3.04	2.96	3.74	3.72	3.39	2.86	3.71	3.39	3.57	3.42	3.38	3.51	2.80	3.30	3.34	3.00	2.74	3.49
工・人文	2.50	4.25	2.75	4.00	3.50	2.75	4.00	3.75	4.00	3.50	3.75	2.75	3.25	2.75	3.75	3.00	2.75	2.00	3.50
工・社会	3.50	2.50	3.50	5.00	4.50	3.50	3.00	3.00	3.00	4.00	4.00	3.50	3.00	2.50	3.00	3.00	3.50	2.50	3.50
工・自然	3.26	3.10	2.60	4.42	3.87	2.95	3.03	3.38	2.95	3.51	3.30	3.16	2.52	3.63	2.98	3.28	2.79	2.40	3.21

6. 3授業科目目の平均値

	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
情報と経済	3.31	2.95	2.88	3.92	4.04	3.07	3.73	3.82	3.49	3.72	3.41	3.39	3.38	3.39	2.86	3.20	2.90	2.50	3.23
歴史学M	3.39	2.86	2.67	4.15	4.20	2.87	3.68	4.05	3.49	3.73	3.69	3.29	3.12	2.57	2.94	3.21	2.83	2.48	3.28
社会学E1	3.19	3.08	2.95	4.32	4.16	2.86	3.46	4.00	3.30	3.76	3.78	3.35	3.46	3.97	3.27	3.73	3.30	2.70	3.59

7. 授業評価の各項目の相関係数

①データ件数を5280とした場合

	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20
問2	1.00																		
問3	0.50	1.00																	
問4	0.41	0.62	1.00																
問5	0.00	0.06	0.05	1.00															
問6	0.13	0.19	0.21	0.15	1.00														
問7	0.21	0.29	0.34	0.03	0.27	1.00													
問8	0.10	0.23	0.23	0.05	0.24	0.27	1.00												
問9	0.17	0.29	0.38	0.00	0.27	0.31	0.36	1.00											
問10	0.29	0.42	0.56	0.02	0.28	0.47	0.32	0.60	1.00										
問11	0.20	0.36	0.39	0.04	0.26	0.35	0.35	0.50	0.58	1.00									
問12	0.20	0.33	0.37	0.05	0.24	0.33	0.28	0.36	0.50	0.48	1.00								
問13	0.29	0.39	0.54	0.05	0.24	0.34	0.22	0.40	0.57	0.42	0.53	1.00							
問14	0.20	0.28	0.35	0.10	0.18	0.18	0.19	0.32	0.40	0.35	0.34	0.43	1.00						
問15	0.26	0.30	0.27	0.06	0.16	0.17	0.17	0.20	0.26	0.22	0.25	0.26	0.33	1.00					
問16	0.38	0.53	0.54	0.03	0.21	0.37	0.25	0.41	0.56	0.49	0.43	0.47	0.47	0.36	1.00				
問17	0.30	0.44	0.42	0.06	0.21	0.26	0.25	0.39	0.47	0.45	0.41	0.39	0.45	0.40	0.66	1.00			
問18	0.42	0.53	0.53	0.02	0.21	0.33	0.25	0.39	0.52	0.44	0.39	0.47	0.47	0.41	0.68	0.69	1.00		
問19	0.29	0.44	0.52	0.05	0.11	0.26	0.17	0.23	0.37	0.24	0.28	0.38	0.23	0.21	0.39	0.31	0.43	1.00	
問20	0.41	0.59	0.61	0.03	0.27	0.40	0.27	0.47	0.64	0.50	0.48	0.55	0.42	0.31	0.68	0.59	0.66	0.48	1.00

②データ件数を58とした(科目毎に計算した平均値を使用する)場合

	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20
問2	1.00																		
問3	0.56	1.00																	
問4	0.61	0.69	1.00																
問5	0.03	0.16	0.18	1.00															
問6	0.35	0.04	0.29	0.17	1.00														
問7	0.50	0.54	0.59	0.05	0.11	1.00													
問8	0.11	0.28	0.23	0.09	0.31	0.15	1.00												
問9	0.27	0.23	0.54	0.01	0.46	0.26	0.38	1.00											
問10	0.50	0.54	0.85	0.04	0.39	0.63	0.32	0.77	1.00										
問11	0.24	0.40	0.52	0.01	0.27	0.37	0.44	0.75	0.73	1.00									
問12	0.31	0.61	0.68	0.14	0.17	0.54	0.29	0.47	0.71	0.58	1.00								
問13	0.58	0.50	0.90	0.18	0.41	0.56	0.15	0.61	0.89	0.56	0.65	1.00							
問14	0.02	-0.18	0.35	0.21	0.34	0.01	0.00	0.52	0.48	0.34	0.26	0.48	1.00						
問15	0.33	0.40	0.27	0.23	0.25	0.04	0.08	0.20	0.16	0.06	0.15	0.14	0.02	1.00					
問16	0.54	0.68	0.77	0.15	0.21	0.64	0.15	0.55	0.80	0.58	0.67	0.75	0.37	0.19	1.00				
問17	0.37	0.52	0.50	0.21	0.24	0.25	0.14	0.51	0.57	0.48	0.52	0.48	0.39	0.40	0.74	1.00			
問18	0.59	0.54	0.73	0.12	0.39	0.56	0.12	0.66	0.80	0.59	0.66	0.74	0.48	0.34	0.87	0.80	1.00		
問19	0.50	0.67	0.81	0.20	0.10	0.59	0.04	0.33	0.64	0.34	0.58	0.72	0.10	0.19	0.75	0.38	0.61	1.00	
問20	0.62	0.74	0.85	0.08	0.28	0.63	0.14	0.56	0.84	0.57	0.74	0.84	0.29	0.26	0.92	0.73	0.88	0.78	1.00

8. 成績判定と授業評価の相関関係

	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20
出席率(1)	0.04	0.24	0.25	0.22	-0.24	0.38	-0.06	-0.08	0.12	0.03	0.17	0.15	-0.08	-0.03	0.19	-0.08	0.06	0.37	0.16
出席率(2)	-0.02	0.23	0.12	0.02	-0.20	0.39	0.04	-0.06	0.11	0.05	0.18	0.05	-0.13	-0.08	0.14	-0.03	0.09	0.15	0.13
受験率	0.13	0.01	0.22	0.34	-0.04	-0.01	-0.09	-0.01	0.01	-0.02	0.01	0.16	0.10	0.11	0.07	-0.07	-0.04	0.30	0.03
合格率	-0.08	0.06	0.24	0.11	0.02	0.20	-0.07	0.16	0.22	0.16	0.14	0.29	0.18	-0.08	0.31	0.05	0.10	0.32	0.25
Aの率	-0.08	0.23	0.08	0.27	-0.01	0.09	0.13	0.04	0.02	0.10	0.15	0.00	-0.13	0.00	0.12	-0.01	0.01	0.20	0.10